

僕らの心の 限界を超えた何か



R18
ADULT ONLY

僕らの心の
限界を超えた何か



も く じ contents

きすあと
scarlet P.3
ちりめんじゃ子（原作：蕎麦屋）

コーヒーうめえ P.33
蕎麦屋（挿絵：ちりめんじゃ子）

僕らは溶け合った P.51
マギラー

僕らの利用規約 P.79
みやほ（挿絵：マギラー）

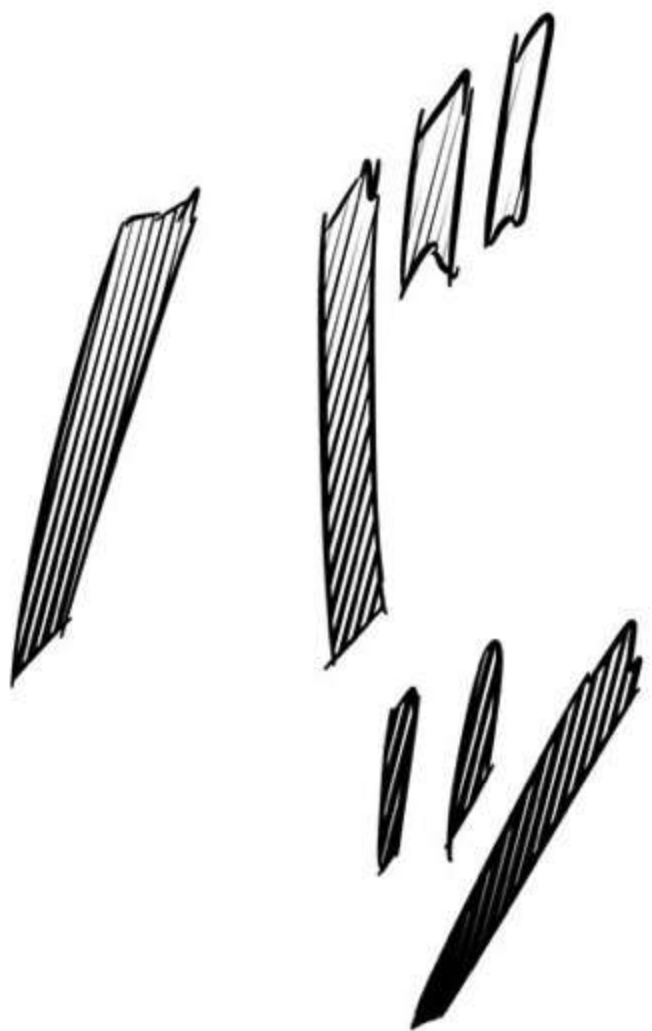
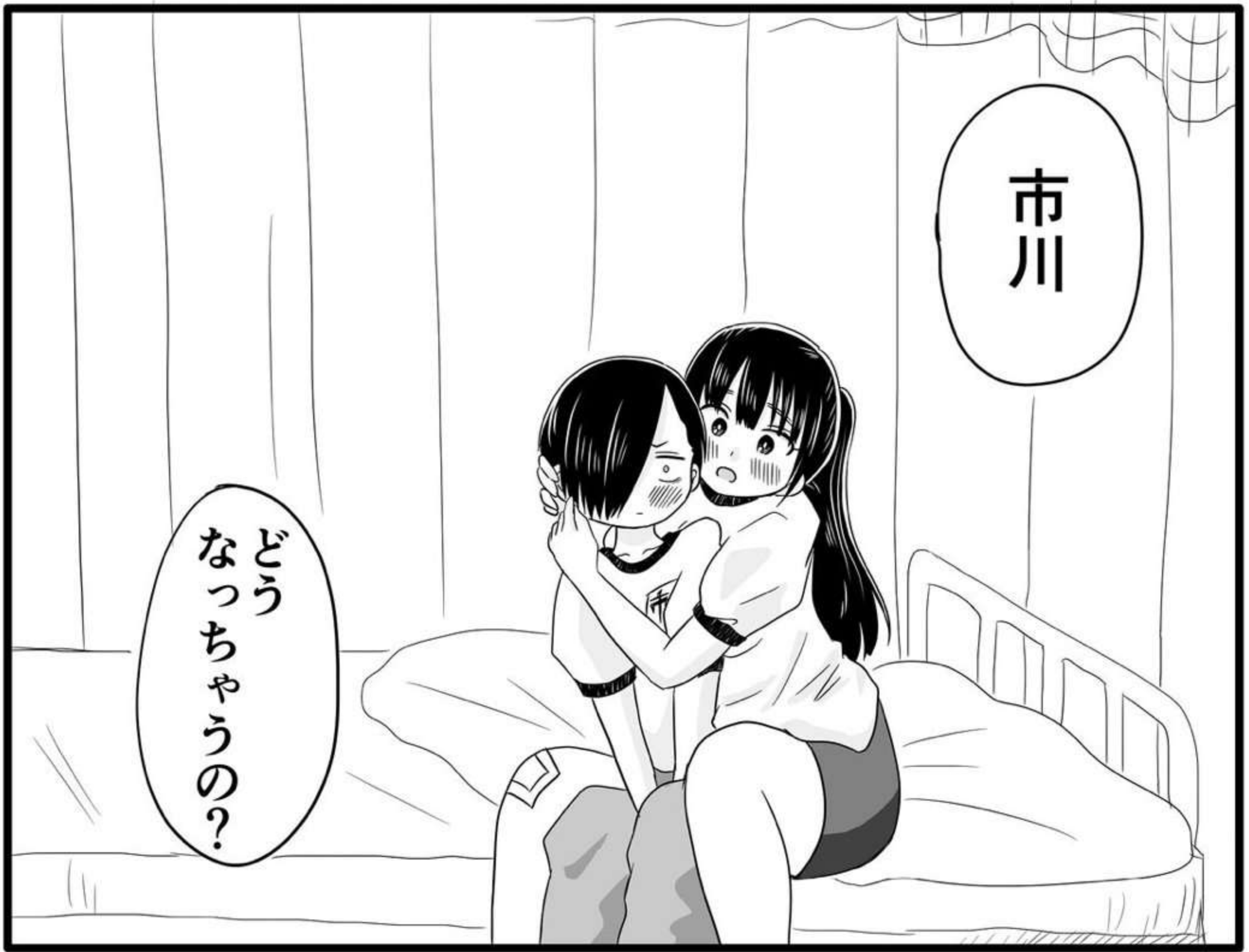
市川山田、同棲中
～特別編・僕と山田のヤバイやつ～ P.96
じよに（挿絵：ちりめんじゃ子）



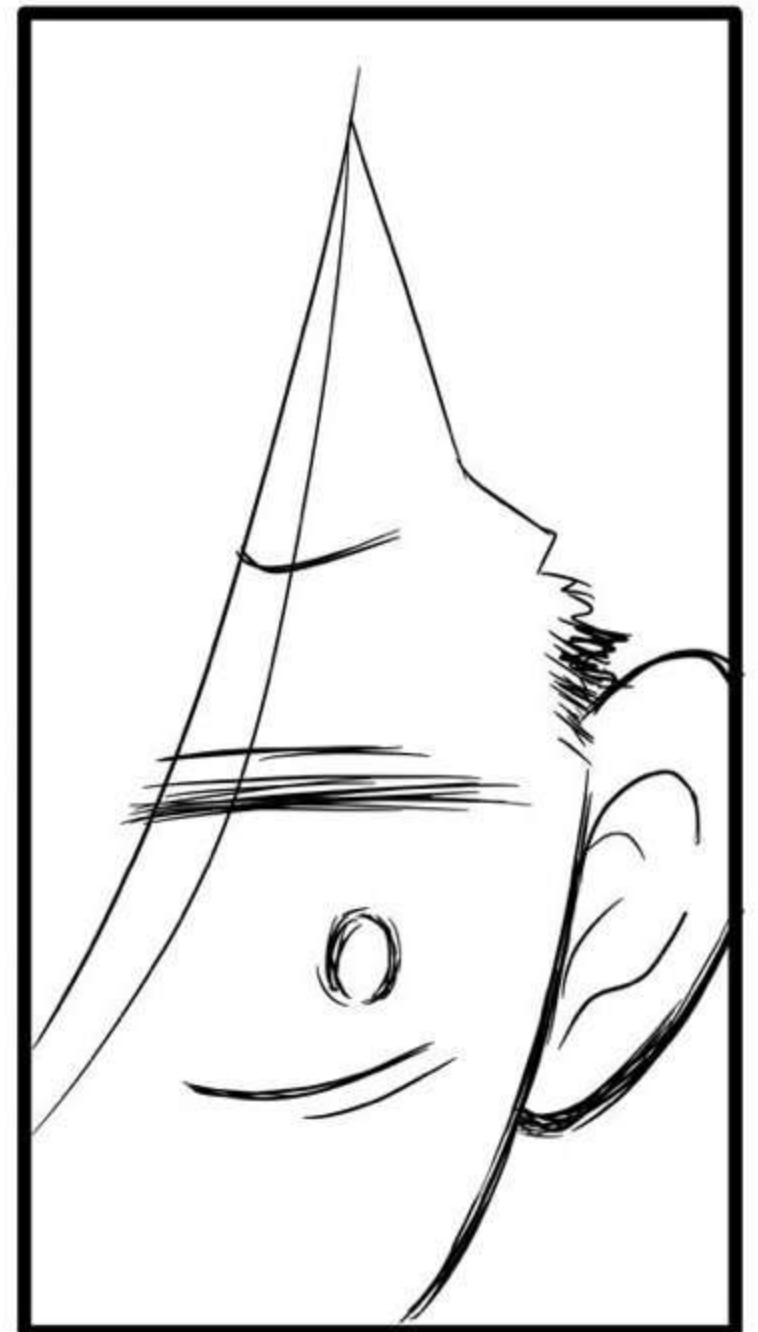


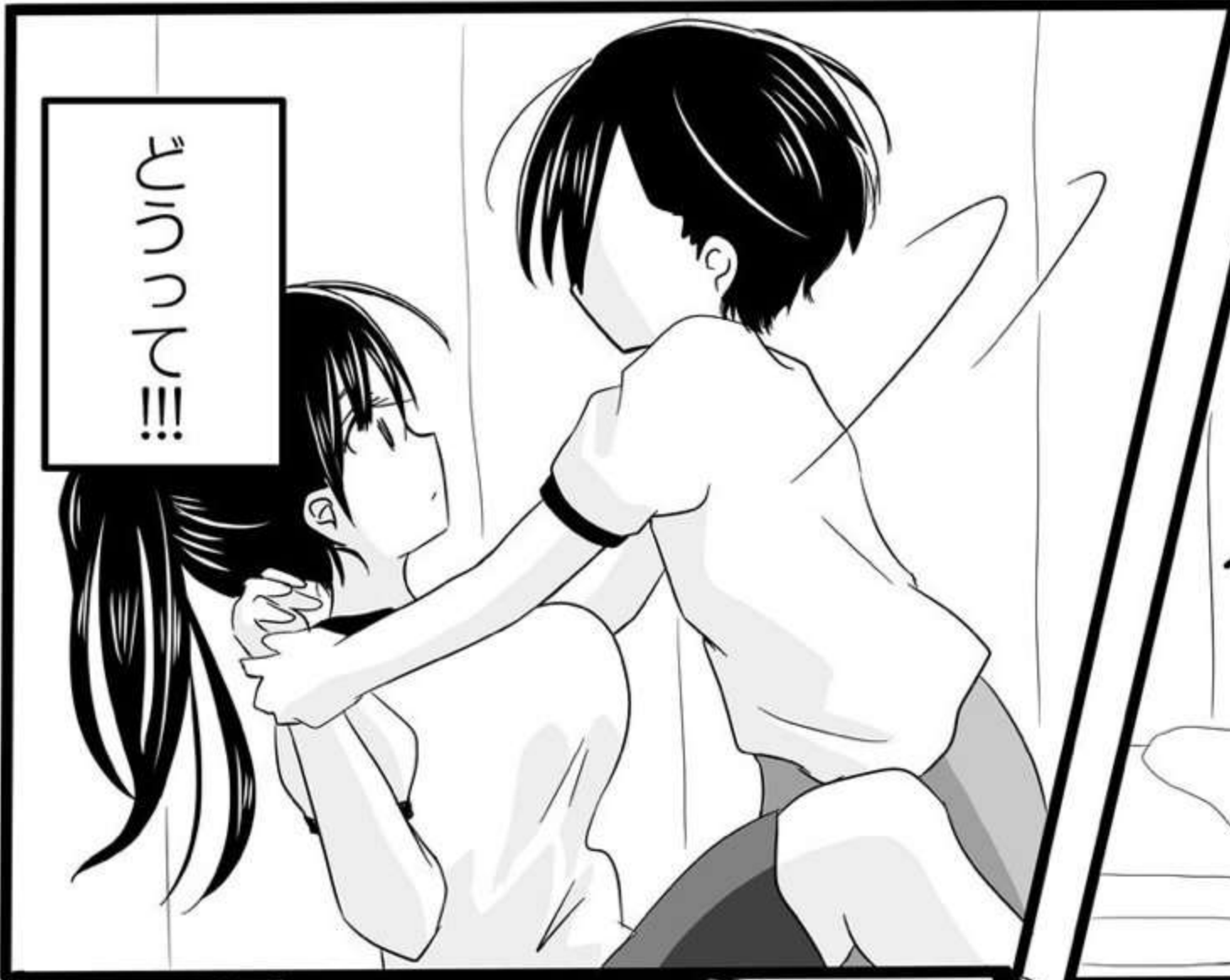
ド
タ
バ
タ



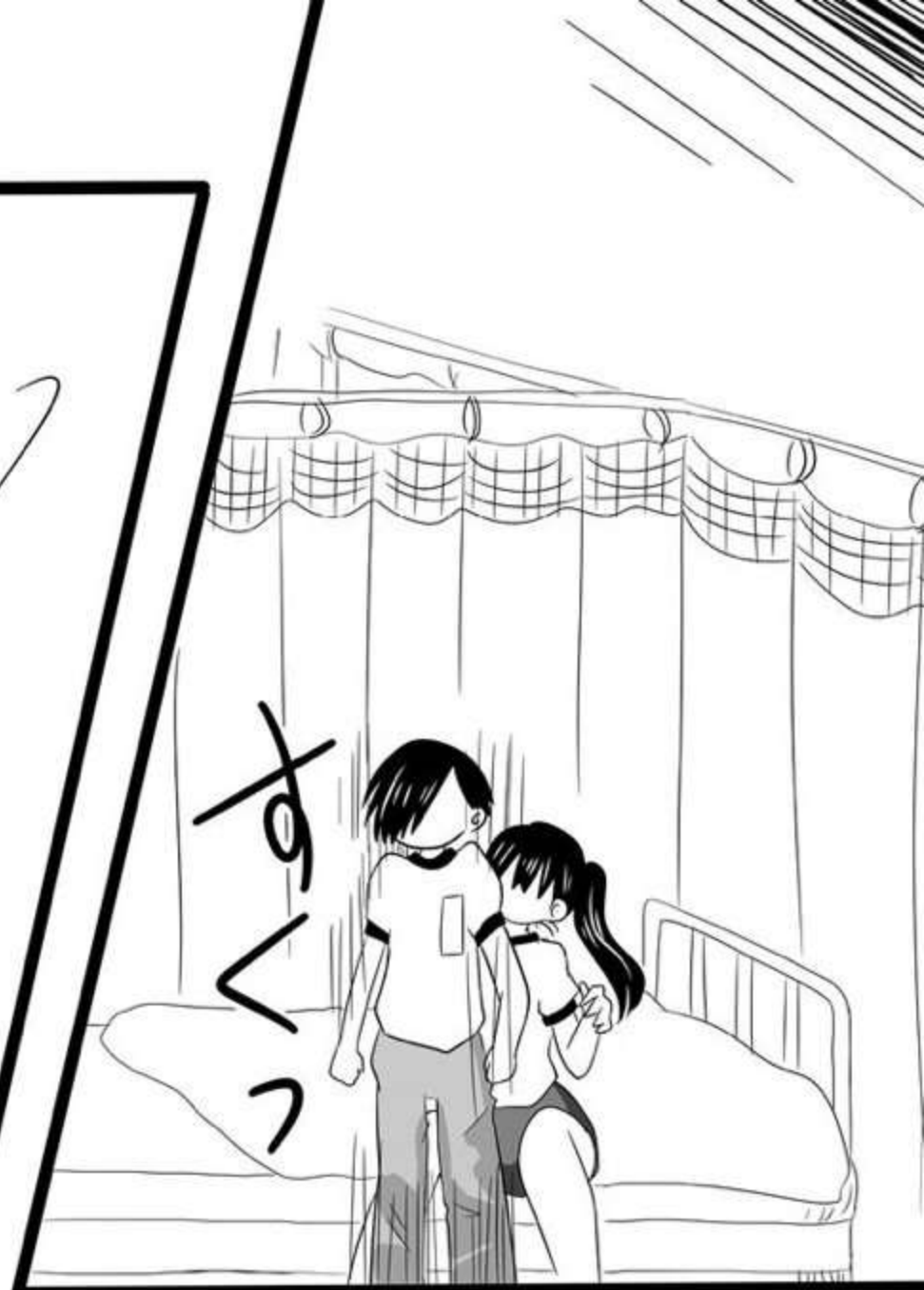


.....
ぬんぬ





にゅにゅ



くっ



どごもいじいせ
あるか

いぢい...

すこんなこと
するんだ

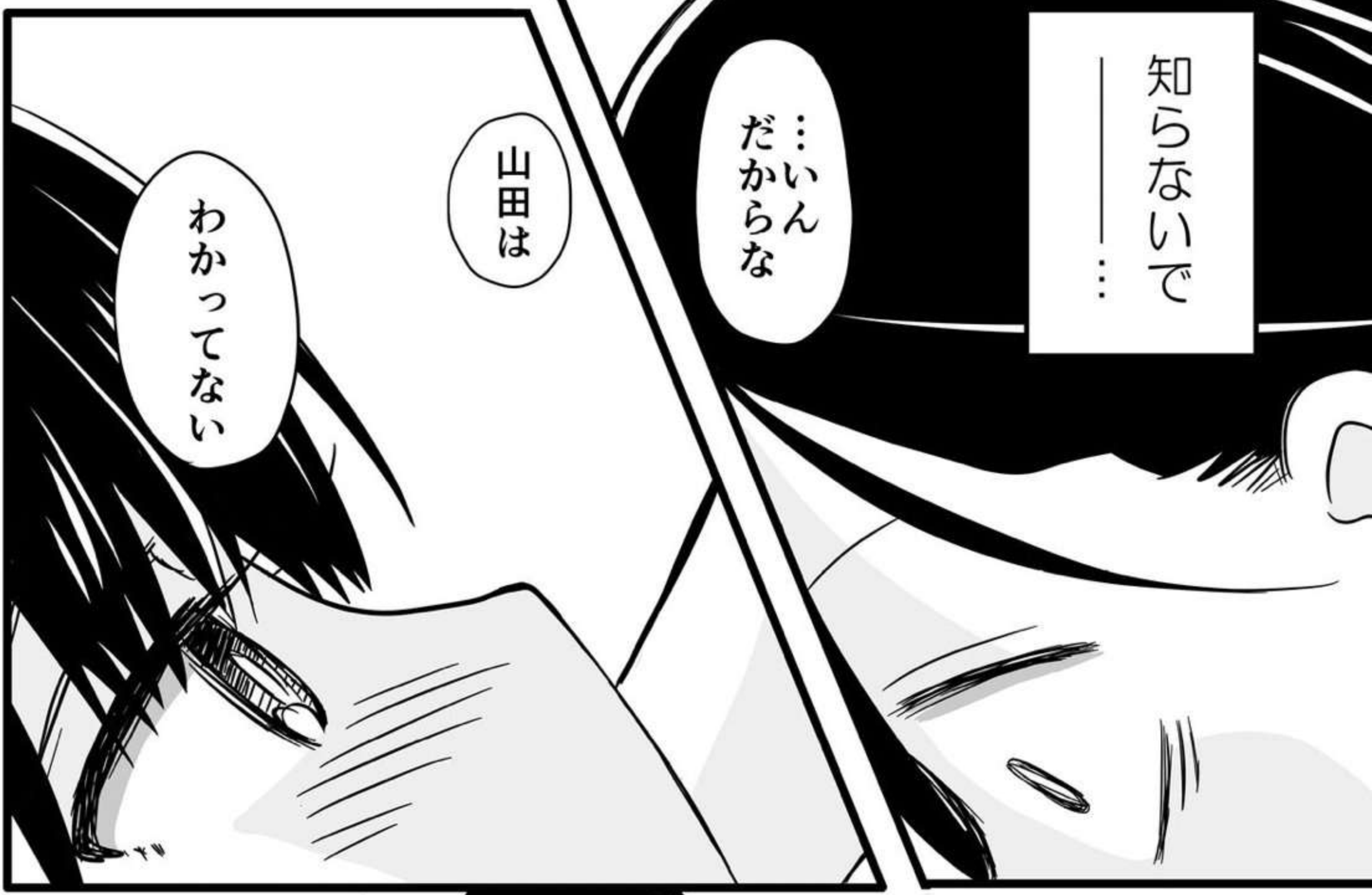
ただの
友：達に

友達？



山田は
なんで
こんな





知らないで
……

……いんな
だからな

山田は

わかってない



ぼ……
俺が……!

どんなに

伝えたくて

葛藤して



あ
あの

ごめ……

いちかわ



思ってた

僕は山田のことを大切に思ってる

…自分のことも大切にしたいと思ってる



だから山田を！…

僕の

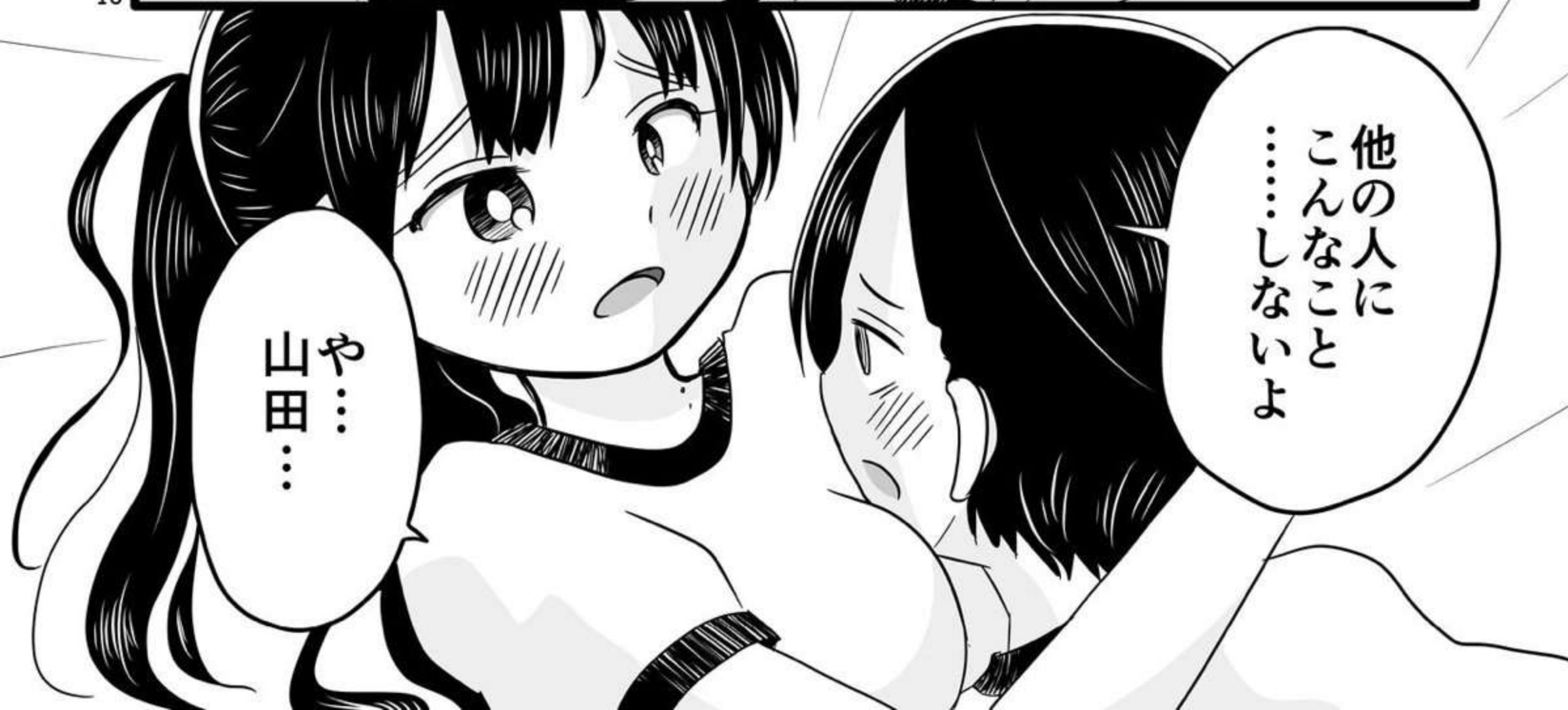


!!

けどもうやめるただの友達にこんなこと…

…他の男にもするかもしれない

も
の
に

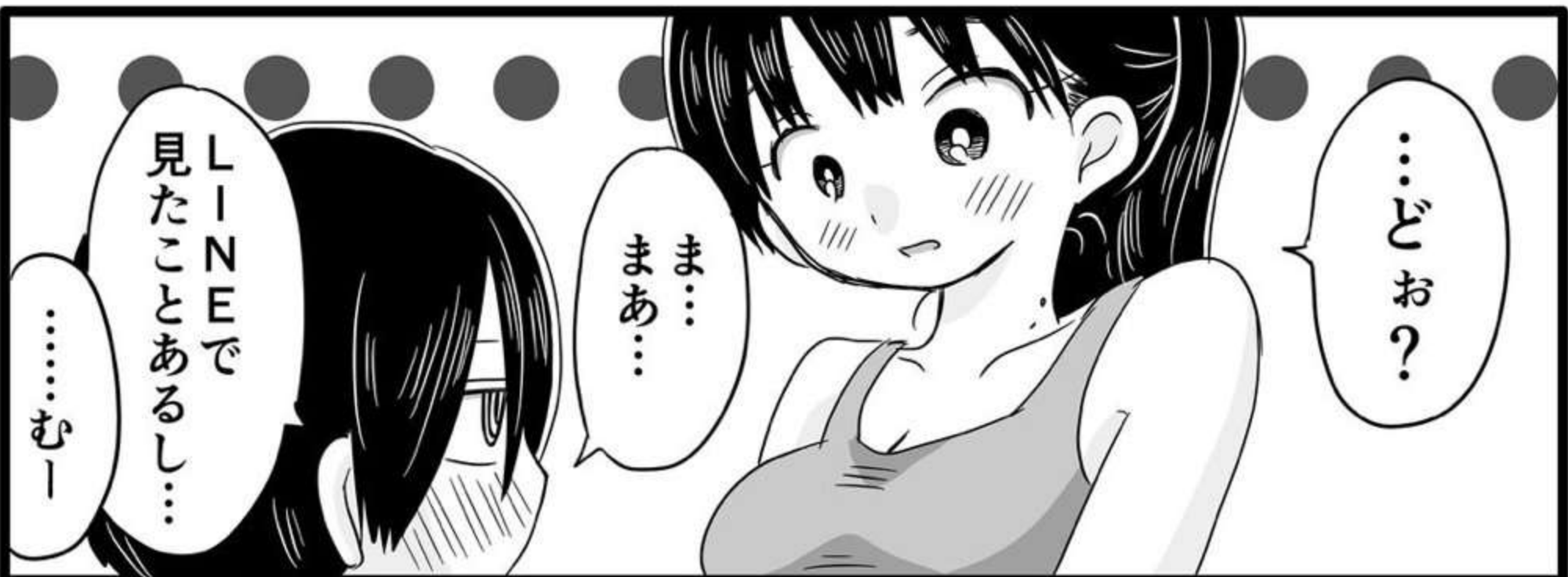


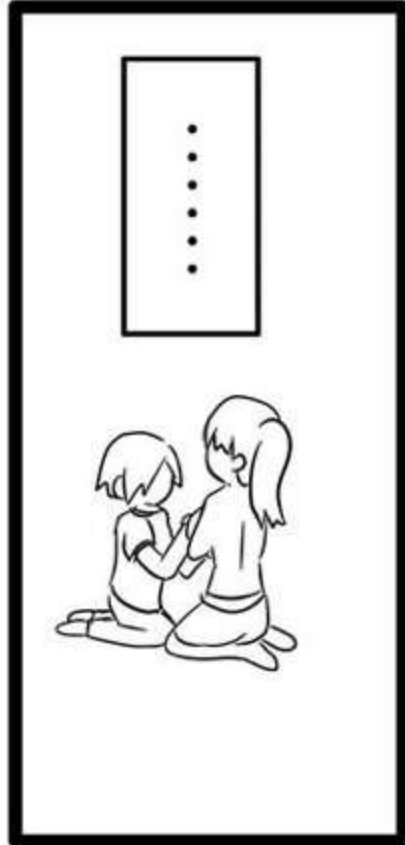
いっ…あ…
う…いいの…?

…さよ

市川の

好き…って…?



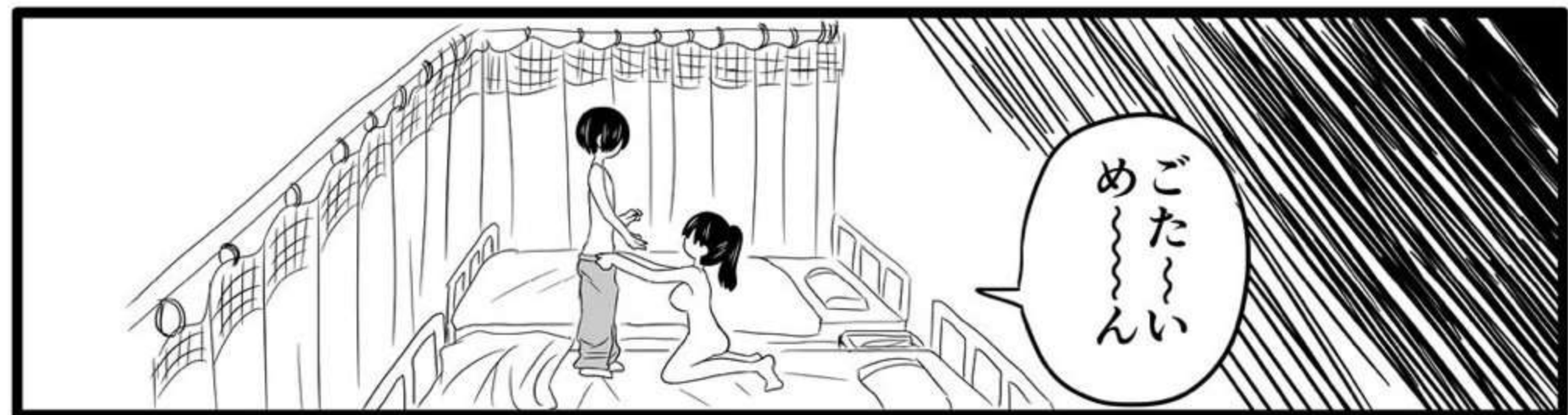




うわあ
うわあ



着てないよ





あ…ふふい
あ…たかい

汗くさい
だろ…

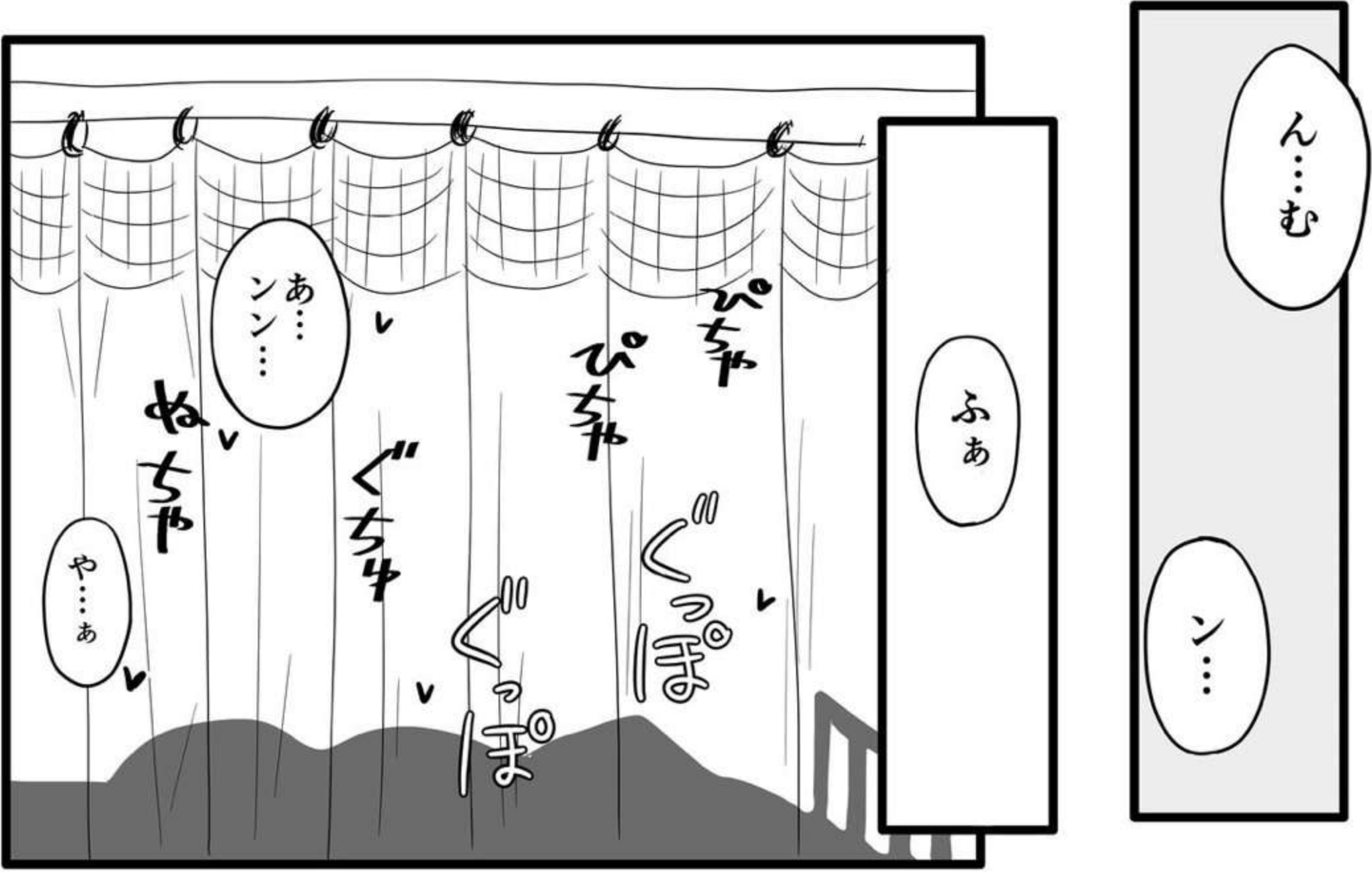
ん…ん
市川のいい匂い

山田も
いい匂い
する…



山田...

ん...
市川あ...



あ...
ん...

ぬ...

び...

ぐ...

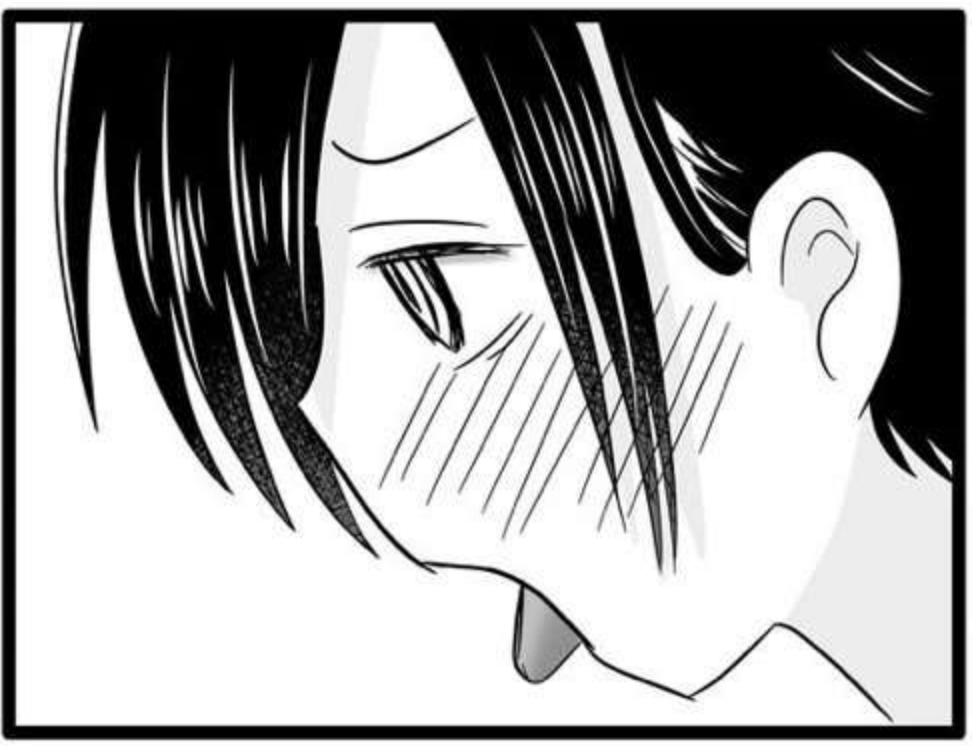
び...

は...

ふあ

ん...む

ん...





いっ
いやっ…その
それはマズイ…



出したい…いや…
山田の…中で…
出したい…

…いいよ…
市川…きて…

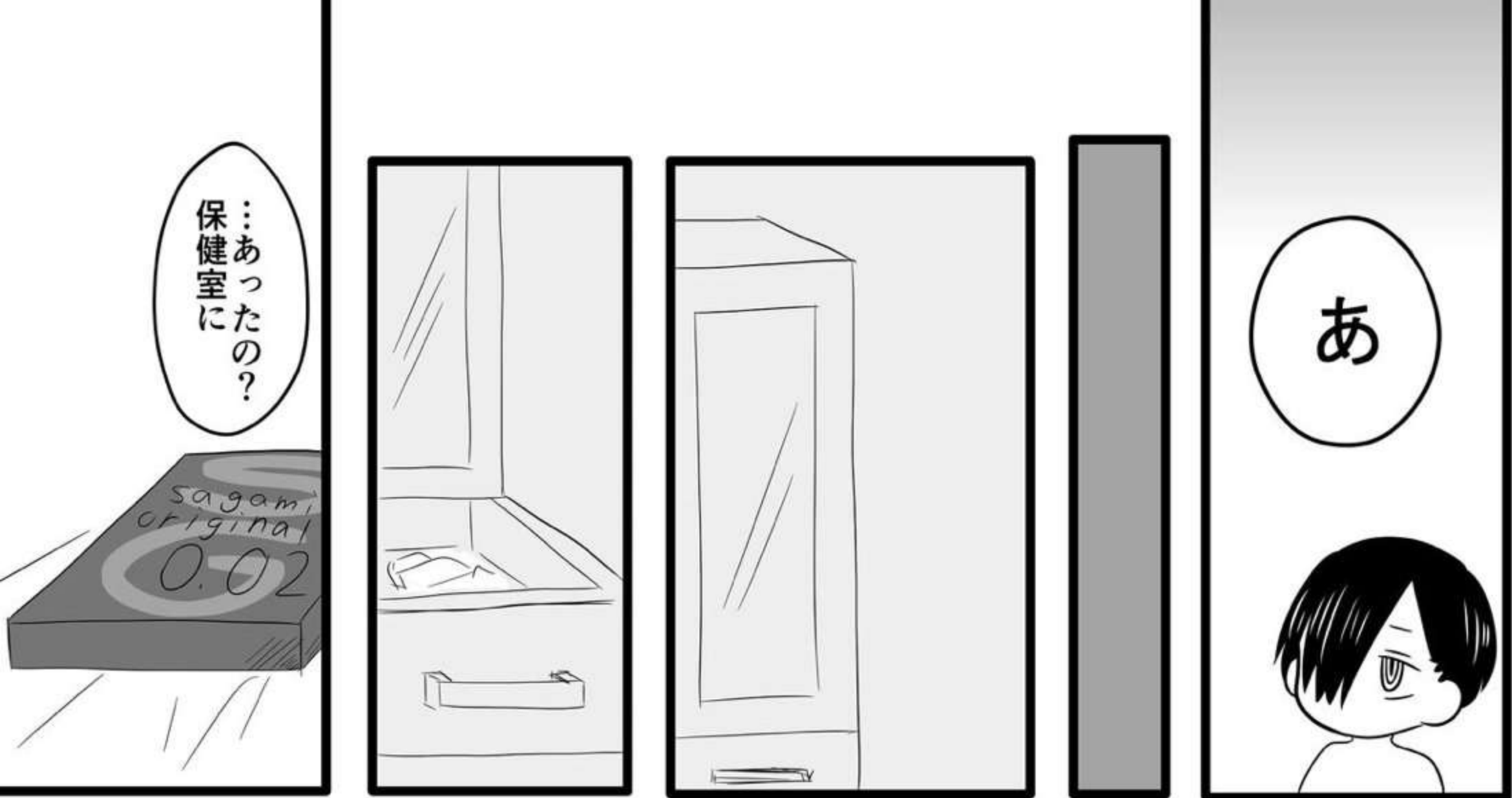


ん…
ツ

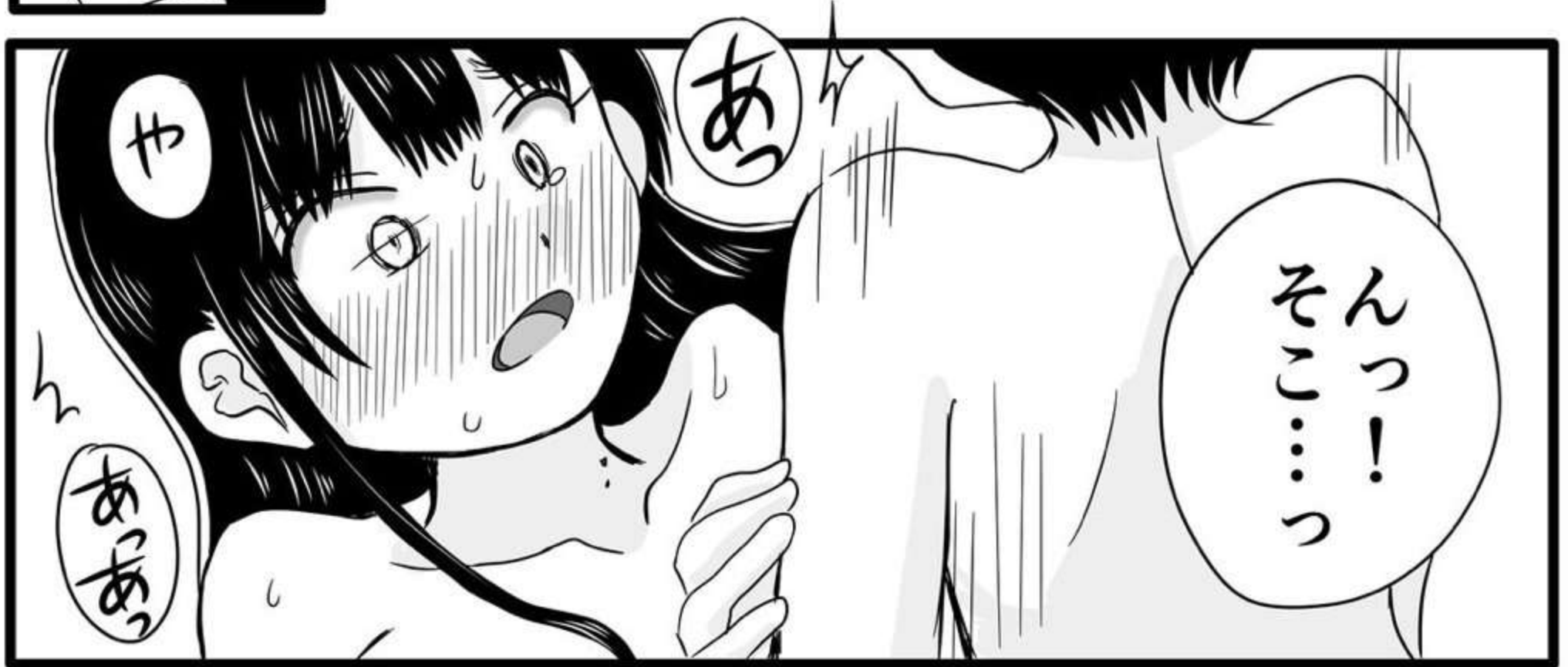
や死死死
バぬんい
イ…
で…
なか…
もも…
い…



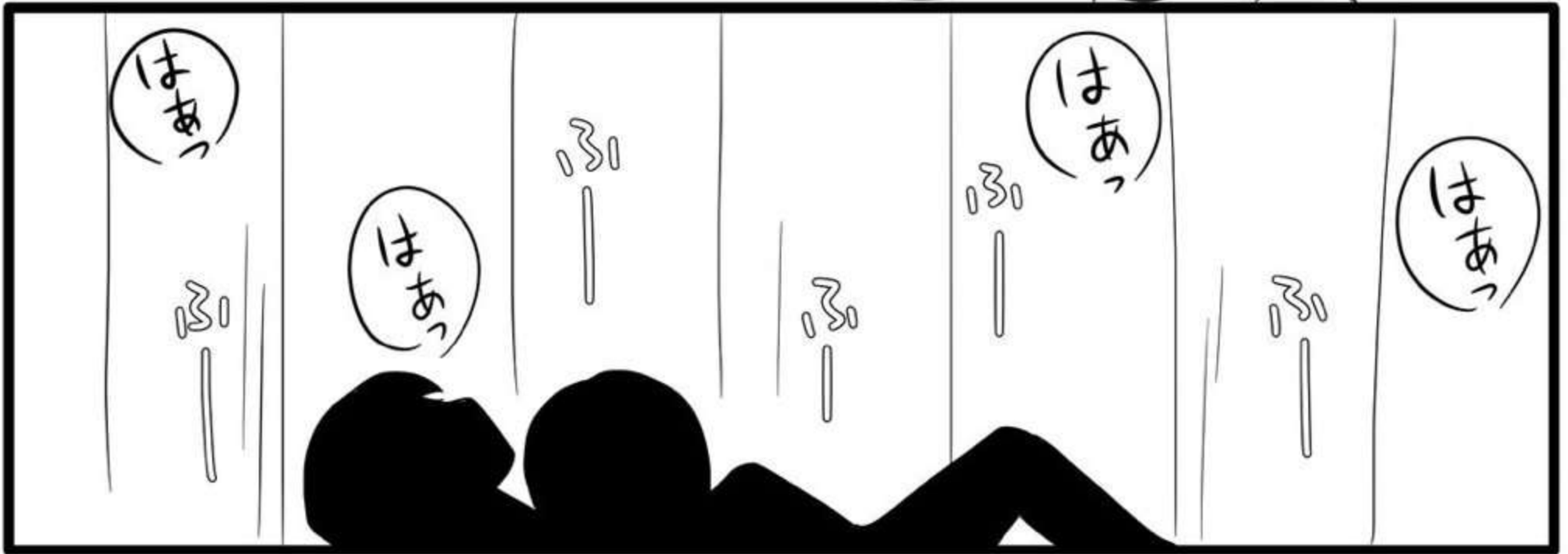
ね…その…
出したい…?

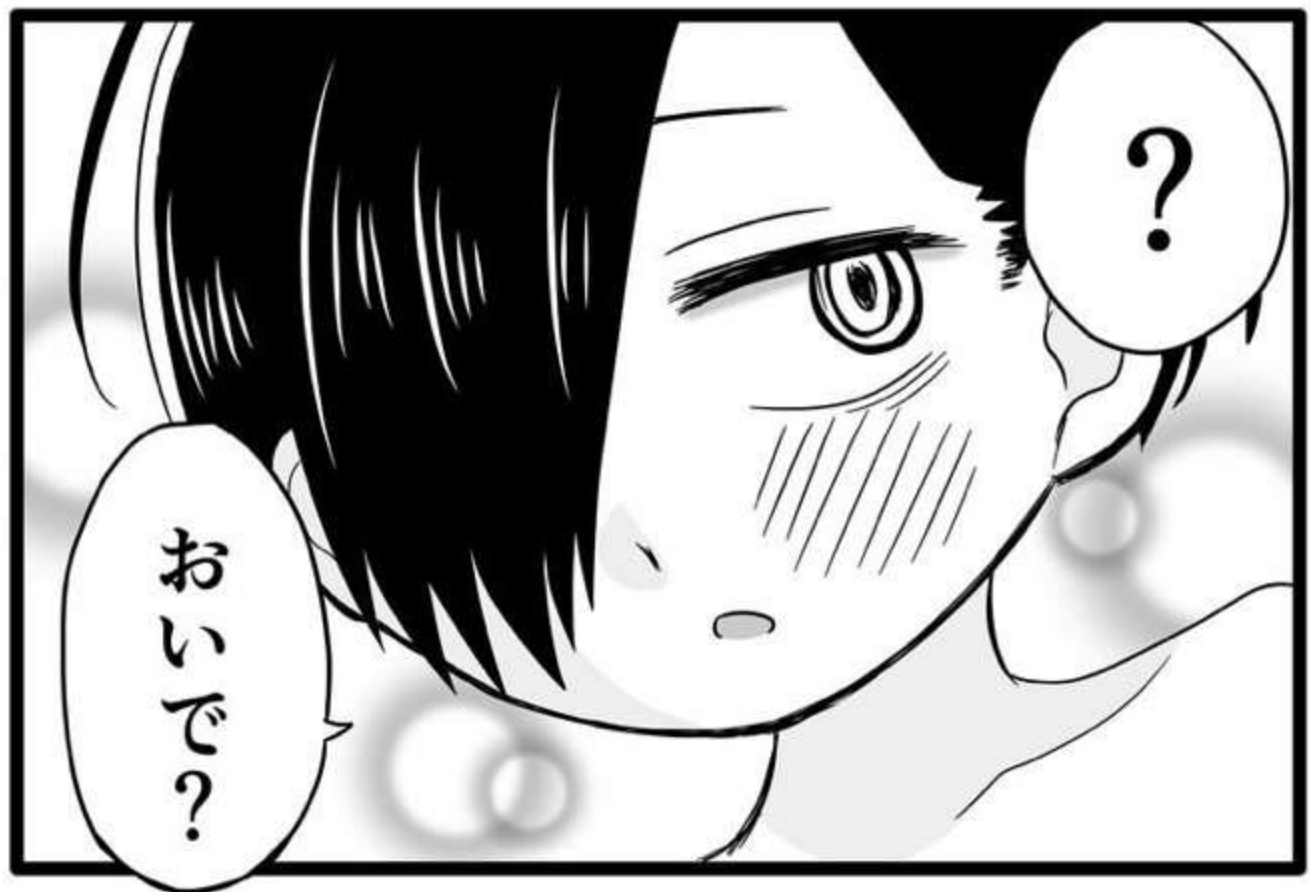














ふいあ

ズ
ズ
ズ

あっあっ
入っ……っ

よ……っ
しよ……っ



!?

あ市川の
ちくびだ

いちくび
エイッ



は
は



なんちゆう
エ口さだ……

なんちゆう えろさだ
南冲 尋定
1493~1526





あー？

あーん

イキそうなのを
ずっと堪えてるが…

どうって
……

……じい……？



ちゅ

ん

ん

じゃあ…



山田も
だろ…



えっちな
顔してる

はあ

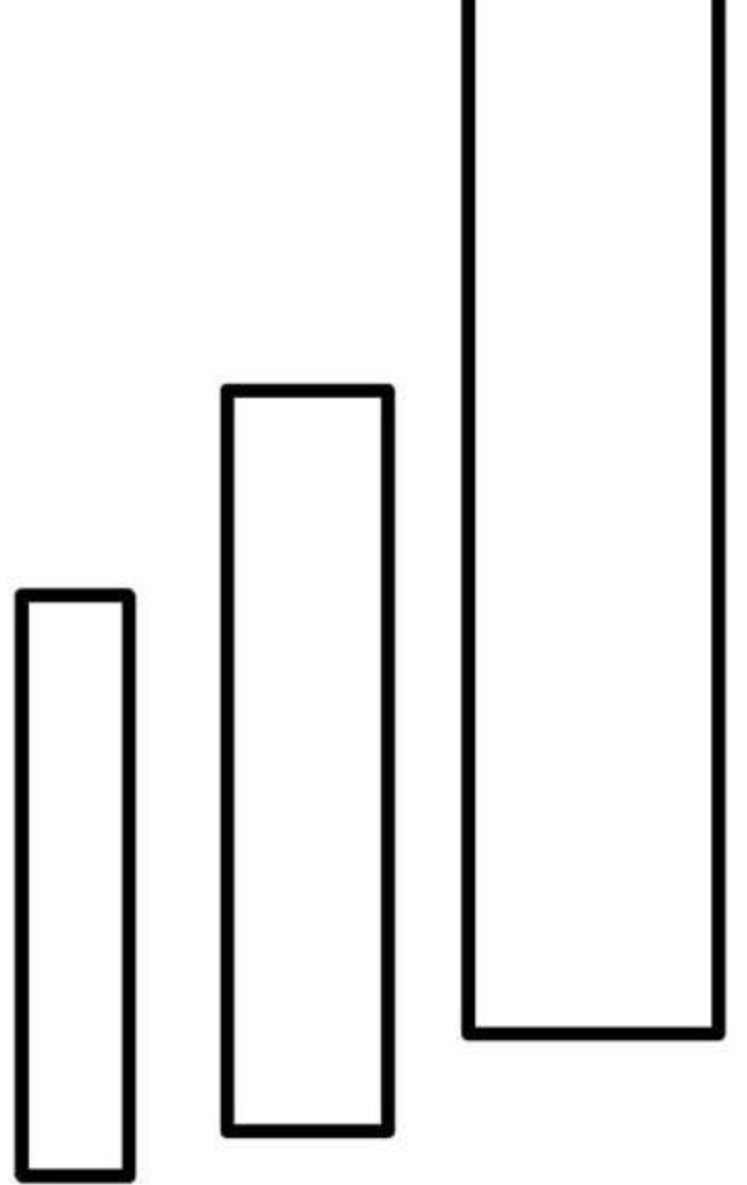


市川

はあ
はあ







あー疲れた。

給食の前にコーヒーくらい飲んでもバチあた
らんでしょ。といいつつゴールドブレンドを淹
れる。

私は目黒第十二中学校の養護教諭として働い
ている。

名前は……さっきまで自分の名前なんかどう
でもよくなるくらい忙しかったし、なんせ地味
な名前なので、やっぱりどうでもいい。

それに生徒から名前と呼ばれることなどほと
んどない仕事柄でもある。

生徒と、年寄りの教師陣、あと脂くさい校長
からは「保健の先生」と呼ばれている。

ちなみに校長は不自然な甘い臭いがするとき
がある。糖尿Ⅱ型だなありゃ。

しかし午前中の業務はハードだった。

この職務、よく「ヒマそう」とか「いつでも
昼寝できそうでいいな」とか「なんじやってそ
う」とかいわれるけど、そんなことないンゴ。

ましてやPixivにエロ小説書いて上げて
ることなんて絶対がない。それも複数プレイの
「罇」とか「嫩」とかタグがついてるものしか書
いてないとかまず有り得ない。知人に知られた
ら死ぬ。

授業はないけど、授業なんかやってられない
ほど地味に忙しいんだよこっちは。

まず私の仕事は大きくわけてみつつ。

今北産業でいうと、

- ・ 応急処置
 - ・ 健康診断、観察
 - ・ 保健主事
- となる。

野球部のやんちゃ坊主に赤チン塗りたくった
り(楽しい)、毛も生えてなさそうな可愛らしく
い女子が日の丸パンツつくっちゃったときの対
処や教示をしたり(最高の一日)、レタスとか体
にいいものを食べてるよ画像レベルのデブにチ
クチクと食べ過ぎ運動不足オナニーし過ぎを指

摘したり(あんまりたのしくはない)とか、そ
れらは別にそれほど苦ではない。

しかし、校長と用務員さんくらいしか知らな
いだろう雑務と報告のファッキンルーチンワー
クー保健主事。なんせこれが忙しいんだ。

月に二回ほど、何ヶ所かの水質検査、照度検
査、空気検査などの環境衛生検査をしなくては
ならない。

一度にするには無理があるし、検査判定まで
時間がかかるので地味に忙しい。こんなのもセ
リーグの最下位のチームにでもやらせときゃい
いの。

あとは保健に関する啓発ポスターをつくった
り、文科省から送られてくるクソダサPOPを
貼ってまわったりもする。残当。

さらに保健指導やら性教育の計画やら……ね
っとり説明する気力もない。新井が悪い。

今日は時間の押す業務ばかりでもう疲れた。
保健室の窓からは、グラウンドで生徒が元気

にサッカーをやっているのが見える。

ていうかあんな小さい子がキーパーやってるの？マジで？うわ飛びついて止めてるわすごいわね。イギータみたいで草はえるわ。

さて、昼からは特に押してる業務も無いし、給食までちよつとベッドで休もう。やぐれやれだぜ。

「あゝよっこいしょ」

ギシ……

もうそんなことを自然にいう歳になってしまった。いかんのか？

はーこの固めの枕とシーツ最高。

民宿みたいで好きなのよねこれ。

もうウトウトしはじめた。

しかし前田先生は妻子がいるからか、性教育の要項の説明とか楽で助かる。マジ助かる。

ただ、あの一年四組のおぼこい実習生上がりの娘っ子はなんなんだ？

『コ、コ、コンドームとか、中学生にはまだ早いと思います！』

バカか。そんなもん小学校低学年で教えるレベルだわ。

ありや30過ぎても処女だろうな。気の毒に。こっちゃん男日照りで悶々としてんのに気楽なもんだよ。

しかし30超えたらホントに性欲ってマシマシになるんだな女って。

そんななんどうでもいいとか思ってたけど、人間の生理現象舐めてたわ。

学研の〈人体のふしぎ〉とかにも記載すればいいのに。

あゝ前田先生一回抱いてくれないかな。

別に不倫なんかしたくもないし、後腐れなしでただセックスしてくれたらいい。週五で。

それかもう、ちんこだけ一晚貸してほしい。

翌朝洗って返すから。

いやそれじゃ血肉バイブでしかない。たぶんつままないな。

やっぱ人間1セットあってこそだよな。温

もりがほしい……

などと考えているうちに、眠りに落ちzzzzzz。

何分もしないうちに目が覚めた。

あれ？何分寝たかな。

時計……あれ、腕が動かない。

ていうか、体が動かない。

あれあれ？なんだこれ？

目は動かせるが、他が固まったように動かないぞ。

いぞ。

やっべもしかしてこれ〈金縛り〉ってやつ？えつなにこれすごい。

金縛り処女の破瓜を保健室で迎えることになろうとは。

でもほんとに動かないわこれ草はえる。

声も出ない。

顔を横にグギギって感じでなんとか動かすことができた。

あーやっべえわこれもう寝るしかないねこれはなんせ何にも出来ないからねしょうがないねおやすみ全部新井が悪い。

ガラガラ

ん？

誰かきた？

ちようどいい助けてくれ。一時間くらいしたら。

「先生はいないな……」

あれ？この声は……虚弱ボーイの市川くん……だっけ？

ギシ…

誰？誰か隣のベッドに座った。

このシルエットは…誰だっけ。

座高が高い…ポニーテール…女の子？

ガチャ

「消毒液と…絆創膏…あと包帯も…？」

ちよつとなんで薬品のある場所把握してん
よ市川くん？勝手に持ち出すのはダメよ。とか
言いたいけどなんにもできない。誰か怪我した
の？

「山…あれ？」

山？あ、山田さんね。あのいろいろ大きい子
の。恵体。

そこに座ってるのは山田さんで、どっかしら
怪我したのを連れてきたのね。

シャア…

「疲れちゃったからさー」

イスに座りなさいよ。体育してたんでしょ？
グラウンドで。絶対砂だらけなのにベッドに座
るのねこの子は。

「シート汚れるだろ…」

そうよそうよ市川くん言ってやんなさい。ガ
サツな女の子は避妊のできないやつと一緒によ
つて。

「ありがと。包帯は大きすぎだよ」

虚弱ボーイらしいわね。必要かどうかわから
ない場合は持って行く派なのね。わたしは逆だ
けど。

「ほら…」

「ん」

「しみるか？」

「大丈夫」

消毒液を塗ったのね。うちのはマキロン（業
務用）だから大丈夫よ。

ペリ

絆創膏を貼った音がする。

「やだなー…またママに怒られちゃう」

親御さんも大変ね。

「昔からよくケガするんだ」

でしょうね。たぶん生傷の絶えない子だった
んだと思うわ。

「見てここ」

ギシ…

「ちっちゃい頃…遊具から落ちてケガしたト
コ。手術して縫ったんだよ」

「…わからん」

カーテンのシルエットにかすかに市川くんの
影が映る。

「……………ああ…」

カップルってよく傷跡見せ合ったりするわよね。なんなの？楽しいの？楽しいのよねー。……特に背中とか。

「ね。ちょっと触ってみて。ここだけ皮膚の感覚ないんだよ」

あー神経までいっちゃったやつねわかる。私にもあるわーガラスでやっちゃったやつ。さあどうする市川くん？童貞ムーヴ炸裂する？

「……………」

「……触ってる？」

「……うん」

声震えてて草。

「……………ホントに？」

「……………ああ……」

「……全然わかんない」

「……………」

この子ら何がしたいの？まあ中学生なんてそ

んなもんよね。異性の肌に触れるだけでとんでもない

「ひゃ」

えっ何。いきなり山田さんのシルエットが跳ね動いたし。

「足裏はダメ!!」

「は……？触ってないが……？」

おっとお？市川くんが大胆なことほしないうらから、何か事故ったわね。しかし山田さんはけっこう敏感なのね。私の足裏なんて真夏の九十九里浜裸足で歩けるわよ。

「卑怯!」

卑怯で。たぶんズルいって言ったかったんだろうけど、それでも何がズルいのか意味わかんないわよね。あの年頃ってよく言うけど。

ていうかこの空気なんとかしなさいよ。

授業中に保健室でイチャイチャしてんじゃないわよ。ていうか今何時？時計が見れない。私

いつまでこの微妙に甘くて青臭い空気の中じゃないといけないの？

「もお！市川ってすぐ私のダメなところ触ってくるよね」

「理不尽にも程がある……」

「私だって触りたいー」

「えっ。何を」

「ん……市川の、……なとこ」

「は？」

「ね、こっち座って」ポンプン

「断る」

「はよ」ポンプン

「なにするんだよ怖えよ」

「いいから」ポンプン

「手当て終わったんだから、グラウンド戻らないと」スツ

「とう」バツ

「うわ」

ドスン

「ふふりん。捕まえた」

「な、ちょ、や、やま」じたじた

なに？なにが起きてるの？

シルエットはひとつだけ……あ、わかった。

山田さんが市川くんを抱えてベッドに座ってるのね。なくんだそうということかナニしとんねん!!

「後ろから、は初めてだね」

「うぐ」

なんちゆうセリフを青少年に。ていうか後ろから以外は初めてじゃないの?なんなの?死ぬの?

「は、離してくれ山田」

「だーめ。私の敏感なトコ触ったんだから、今までの分も含めてお返しするの」

「いやその、今マジでマズいんだって」

「なにがマズいの?」

「そん、言えるわけ……」

「えい」ツン

「キエエ」ビクン

南国の鳥みたいな声で草。

市川くん脇弱いよね。強い人なんて見たことないけど。

「ちょ、やめ、ほんと、山田」

「だめ、逃げないの」ムギユ
「うぐ。くくくく!!」

あーあの子にあれだけ抱えられたらもう逃げられないわね。たぶん胸とかすんごい押しつけられてるし。これで勃起しない中学生なんて逆に心配になるわ。

「市川はどっちの耳が弱いのかな」クリクリ

「ぐ!うぐくくく」ビクンビクン

「あ、右が弱いんだ」ふっ

「ひっ!」ビクン

「あはは、やだこれ面白い」ふっふっ

「ひう!うあ!」ビクンビクン

ぐう畜ね山田さん。市川くんのちんこえらいことになってそうね。

「んく」あむ

「うわあ!?ぐ、あああ!」ビクンビクン

え、なに?もしかして、耳舐めてるの?ちよつと行き過ぎよ。痴女なの?

「はあん、しょっぱい」レロレロ

「山田!やめ、やめろって!これ、これ以上は」
ビクンビクン

「んふふ、これ以上は、なに?」ちゅぱ

「はうっ」

「市川、どうなっちゃうの?」

ヤバい。トーンが風間ゆみだわ。興味津々とかいう範疇じゃない。母さんお元気ですか。目黒には中学生痴女がいます。

「……いんだからな」

「えっ?」

えっ?

「山田が、悪いんだから、な」

あっ市川くん泣いて――

「ご、ごめん市川!ちよつとやりす――キャッ」

ドサッ

えっ?

「いつもいつも、僕がどれだけ葛藤して、我慢してるか、山田は知らないだろ」

「い、市川……ごめん、なさい」

シルエットは、市川くんが山田さんを、抱え込まれたときの姿勢から、後ろに倒れ込んだかたちで押し倒している。

「他の男はどうか知らないけど、僕は、山田を大切に思ってる。自分のことも大切にしてほしい、と思ってる。……思ってた」

「うん……」

「けど、もうやめだ。友達にもこんなことをするんなら、他の男にもこんなことをするかもしれない」

「えっ!?そ、そんなことしなー」

「だから!だから、ぼ、俺が、山田を――」ガ
バツ

「んむ!」

えっ!?覆い被さったわ!ってうわーめっちゃキスしてるわーちゅっちゅしてるわーうわー。

「ふは」

「……僕が山田を、僕のものにする」

ヒューーッ!!告白k t k rていうかポーズじゃないこれ?いやもうむしろいただきまずに近いつていうかダメダメにいつてんよここ!保健室!ちよつと趣向のあるラブホじゃねえつつつてんでしょ!

「……市川」

ちよつと山田さん拒みなさいはやくこのままだとあなた手籠めにされちゃうのよダメでしょそんなの

「……うれしい」ぎゅっ

ええんかーい!!もう手籠めじゃなくなったわねどうしようもないわこれ

「……いいのか?」

一瞬でへたれる市川くん草。

「……いいよ。市川の、好きにして?」

「……わかった」

あーあ。オチたわね。まあそんなセリフ耳元で言われて落ちないオトコなんて目黒にいないわね。

「山田……」

「ん……」ちゅ

うーわめっちゃ接吻してるわー。そんな頭なうに抱え込んだじゃってうーわもうそんな貪るよ

「はふ……」ちゅ

「ん……」

「はあ……山田、舌出して」

「え……うん……れ」

「あむ……」むちゅ

「んむン……」むちゅちゅ

「は……」レロレロ

「ン……ン……」レロレロ

ふっか。キスふっか。シルエットで舌チロチロし合ってるの丸わかりなくらいふっか。すごいわね蛇みたい。

「はあ……」ふは

「ぶあ……はあ」

「……………」

「……はあ、いちかわ……すき」

「俺もだ……」

「市川、脱がして？」

「えっ!? あ、ああ……わかった」

ちよつとリードされはじめてる市川くんかわ
いくて草。勢いにまかせすぎちゃったのね。

「よっ」

山田さんが市川くんもろとも起き上がるのが
見えた。軽っ。

「ん」ばんざーい

「……ぬ、ぬが、脱がす、ぞ……」

声震えてるし。おおーっと市川くんの手が山
田さんの腰にそうそうそのまま上にシュルツて
ほら脱げたいやー体操服って脱がせやすいよね
くいやダメでしょ!! 今どき健康診断でも上脱が
せないよ! なにやってんの!

「どお……?」

シルエットでもわかる山田さんの恵体。90の
Gはカタいわね。うらやま死。あのラインは:
スポーツブラね。

「あ、ああ……LINEでみた通りだ」

そうよねくわかるわくLINEでみた通りの
なんですって!? すでに下着姿の自撮りを送って
いたと申すか!? 今どきの子はすごいわねくこっ
わ。中学生痴女こっわ。

「……………」えい!」バツ

「うわっ!」

うわ脱いだし。自分でブラ脱いだし。ちよつ
とだけ躊躇ってたけど。あの時間で覚悟を決め
たのね。

「どお……?」

「う……す、すげえ」

わかるわ。もうそれしか言えないわよね。

「ね、触って……?」

「う、ああ……!」むにゅ

うーわ自分で手を取って触らせたわこの子。
山田選手やや優勢です。

「うああ……すげえ」もみもみ

「ん……」

「はあ、はあ」

「ね、市川も脱いで」

「え、マジで……? 恥ずかしいんだが」

女の子脱がしといてその言い草。女子か。

「見せて」

「あ、ああ……」

「はいばんざーい」ズボ

「ひゃん」

おかんか。条件反射的に脱がされる市川くん
草。

「下も」

「ああ、下も……下も!」

なんでびっくりしてんのよ。あんたが誘ったんでしよう。誘った？うん、誘ってた。

「もうちょっと後で……」

「だめ。ん、じゃあ私が先に脱ぐね」

「えっ」

えっ。

「よっ」 シュルッ

うわほんとに脱いでるわ。モデルだって聞いてたけど、さすがに度胸が違うわね。……中学生なのに。

「ほら、私なにも着てないよ」

「うあ、うああ」

なんで市川くんが狼狽してんのよ。ていうかハーフパンツと下着いっしょに脱いだってこと!?結婚して五年目ムーヴよそんなの。

「ほら市川」

「わ、わかった」

「脱がしたげるから立って」

「嘘だろ!？」

「はやく」

「くそ……覚えてろよ」

捨てぜりふは草。

「ご、ごたいめくん」

少し恥じらいが残っててちょっと安心。いやセリフがババアようどうにかしなさいよ。

「えい」ズルッ

ぱちん

「ひゃ」

「うう……」

「うわあ……すごい……こんななんだ」

音。すごい反り返りがお腹に当たる音がしたわよってか嘘でしょ!?なにあの大きさ。完成してるじゃない市川くんの。シルエットでもよくわかるほど浮かび上がってるわ……なにあれ Pornhubで見るくらいのやつじゃない。

こっちも中学生レベルじゃないわ……ゴクリ。

「あ、あんまり見るなよ……」

「触っていい？」ちよん

「うっ。聞く前に触るなよ」

「ふわ〜すごいカッチカチ。ね、なんか出てるけど、これ？」

「こ、これが我慢汁……てやつ。カウパー汁」

減点。カウパー氏腺液よ。射精前に尿道を洗浄するための分泌液よ。潤滑剤も兼ねてるから、うまいこと設計されたものね。ここいずれテストに出るからね。

「ふくん。ね、どうして欲しい？」

「うえっ?い、いいよなにもしなくて」

万金の問いを断るなよ!

はっ!そうだ止めなくちゃいけないんだよ私!まあ動けないからどうもできないんだけどね。悔しいな。

「じゃ、市川、こっちきて」

「ん」

むぎゅ

「んふ、あったかい」

「汗臭く、ないか？」

「んーん、市川の、いいにおい」

「山田も、いいにおいだ」

おかしい。こんなことは許されない。神聖な保健室で、動けないとはいえ養護教諭である私の目の前でアンなことや懇^{コン}なことが始まろうとしている。

そして私自身も金縛りのためか、しっとりとした汗をかいてるし、さらには股間がぐっしりとしている。触らなくてもわかる。間違いない。だってふたりのやりとり見てたらキョンキョンしちゃってるんだもの。

あーくそたまんねえわ中学生同士のこの初々しい感じ。ひとりは三十路レベルの痴女だけ。

「ん……市川、もっとキスして？」

「ん」むちゅ

「んむん」

「はあ、やまら……」

「ひちかわ……」

シルエットからは、抱き合う中学生が優しく激しく接吻を繰り返す光景が浮かび上がってや

めやめー実況やめ。いくらなんでもやってらんないわよ。

ていうかさあ、誰か入ってきたらどうするの？可能性ゼロじゃないわよ。全裸の中学生男が養護教諭の横で乳繰りあってんのよ？あれこれ私詰んでない？バレたら懲戒免職一直線地元に戻ってひっそり後家暮らし晩年は直腸ガンとアルツハイマーで狂ったようにうわあああ君たちいますぐ服着てグラウンドに戻って大丈夫人の噂なんてすぐ消えるからあれ？いつの間にか体勢変わってる？

「んむ……んむ……んふ……」ぐっぽぐっぽ

「はあ、はあ」びちゃちゃちゃ

えっ？なにこれ。なにこの音と体勢は。一文字になってる。

「はあ、市川の美味しい……」ずちゅ ずるるちゅ

これは……えっシックスナイン？

いつの間に!?しかも側臥位で？横向きで？社長と愛人みたいなペッティングしてんじゃないわよ。しかもセリフの手練れ感がパネェわ。

「ね、市川。こっち向いて」

「ん、ああ」

「おっぱいでしてあげるね」

「うあ、ああ……頼む」

待ってなんで初めてでパイズリができるの!?何食べたならそんな生き様になるの!?どうやったから挟めるほどおっきくなるの!?わかった、神様は差別主義者なんだわ。きっとそうなんだわ。ファックザガッド。神は死んだ。乳で。

「ん……ふ……」にちゃにちゃ

「うう!山田……山田……」

「ひちかわ、ひもちいい?」にちゃくぶずちゅるるる

「ああ、山田、山田、山田」

待って。挟んでしごきながら先っちょ吸ってるの?まああの大きさならできそうねって違う。違うの。オトメがそんなことしちゃうダメなの。そんな恥じらいと最も遠いプレイスタイルじゃダメなの。わかる?わからないわね。あゝ頭なんて撫でちゃって市川くんもうほんとバカ。バカバカ。ふたりともどんな顔してんのかしら。

「ね、市川。その……一回出したい？」にちゃ
ちゃちゃちゃ

「だ、出した……いや、山田の、中で、出した、
い……」

「うん、いいよ、市川、きて」

「おお……ついに本番ですか。」

「あれ？避妊具は？」

「もってるわけないわよね。」

「生？レア？ブルーレア？」

「ダメ!!それはダメよ!!」

「生で膣内射精とかダメ、絶対。」

「何があってもそれだけは止めなければ。」

「ふんぬううああああ動け体あああああや
っぱダメ。オワタ。」

「ちよ、ちよと待ってくれ。やっぱりゴム無
しはマズい」

「偉い!!いいぞ市川くん!!その意気だ!!ゴム無
しは挨拶のできないやつと一緒にだ!!さあささ
とパンツはいてここから

「そうだ、さつきー」

「え？」

「あれ？市川くんどこいくの？その方向は薬品
棚？そんなとこに――」

ガラッ

「あった。どこかで見た箱だと思った」

「え？ゴム置いてあったの？保健室に？」

「あああああああああ思い出したそうだ性教
育の時に使うサンプルのサガミオリジナル（無
料）をナプキンとタンポンといっしょに置いて
あったんだあああああわあああああちきしょお
おとおおでも偉いぞ市川くん!!いやそんなに
偉くもない!!どうしようもなし!!コロシテ……
コロシテ……」

「見して見して。へーこんななんだ。あ、私
がつけてもいい？」

「え？あ、ああ。わかる？」

「えーと、たしかこうやって、先をねじって
……」

「そうそう、まだ教えてないはずだから何を観

たのかは聞かないけど、ちゃんとつけてあげ

「で、ほうやっへふちにふわえて」

「待って何を観たの山田さんいや山田？もうそ
ろそろ実年齢教えてくれないんじやない？
絶対詐称してここに来たでしょ？吐け!どこの
スパイだ！」

「ん……む」

「うわ……山田……すごいな」

「えへへー。すごいでしょ。さ、つけたよ」

「ど、どうも。じゃ……」ギシ

「うん。来て、市川」

「まーそんな足開いちゃってまあ。受け入れる
気マンマンじゃない。どうせびっちゃびちな
んでしょ？エロ同人みたいに。もうわかってる
わよ？エロ同人みたいに。」

「ん……ここか……？あれ……？」にちにち

「んっ……あっ……そんな、入り口で、んっ、
こちよこちよしないで……」

「お、おお……なかなか難しい……でもこの体

勢もめちやくちやエロいな……」

「もお、ばか……」

「ここか？」

「んっ！そ、そこ」

「わかった」ギシ

「そのまま、きて、いちかわ」

「山田——好きだ」

「んう!!」

「ああ、あ……入った……」

「はあ、はあ、市川……」

「山田、大丈夫か？ごめん、痛い思いさせて」

「へいき。そ、そんなに、痛く、ないから」

「山田……」

「う、あ、ね、頭、なでて、ほしい」

「ん」

はくはくついにやっちゃったわねこのふたり。でもなんか神々しいわ。すごく慈しみ合ってるのがもう。……あれ？私泣いてる？

「山田」

「ん……はむ……」

「んむ……」

「はむ……ん……は……はむ……」

「ふあ……山田、ゆっくり、動くよ」

「はあ、ん、うん、わかった」

「ふっ……」

「ん！ん……ふ……だ、大丈夫」

「山田……山田」

「はう！ん……ん……う……く……ん」

「は、は、はっ」

「あ……は……は……ん……ふ……あ、ん、ん、ん」

「痛かったら、言って、くれよ」

「だい、じょう、ぶ。いま、ね？いちかわで、おなか、いっぱい。でへへ」

「フフツ」

「あ、いち、かわ、わらった？んふ」

「ふっ。ふふ。ふふふ」

「はん！」

「ど、どした。痛かったか？」

「ちが、うの。みみ、よわいの……息、かかったの」

「！山田……好きだ」

「んう！だ、だめ、それだめ。ね、みみは、だめ、なの」

「山田……僕は、卑怯なんだ。ふっ」

「はあん！だめ、だ、め。ん！んふうん！は、あ、あ、あ、あ、ん！」

「やまら……すきら……はむはむ」

「は、んむ！ん！は、あ！あっ！ん、ね、いち、か、みみ、まって、も、だめ、ひ！ん！は、は、は、ん！あう！いや、まつ、あん！は、あ！」

「やまら、かわいい、かわいい、すきら、やまら、ぼくのやまら、もっと、もっと、やまら、すきら」

「はう！う！あう！あう、あ、あ、あ、ん。んむ。は、ん！ん！ひちか、ん！あ、あ、あ、あ！あううん！あ、すご、だめ、も、だめ、きもち、いい。きもちい、みみ、おなか、きもちいの。いちかわので、すご、きもち、いい、の、はん、あ、あ、あ、あ！」

「山田、あったかい、すごい、僕も、きもちいい」

「いち、かわ、も、きもち、いい？そ、ん、うれ、しい。もっと、もっときて、いいよ、いちかわ、もっと、もっとして」

「ああ、山田、僕も、うれしい、ああ、山田、山田、やま、だ、う、あ、あ、ああ、スー、ああ、スー、ああ」

えらいことになってきたわ。

下手なポルノより脳髓侵されそうねこんなの聞いていると。

好きな男にズッコンバツコンされながらヨワイ耳舐められるとか考えただけでパンツの替えが三枚くらい要るわね。とりあえず一枚ください。

「ああ、やまだ、スーリーああ、はあ、スーリーああ、スーリーぐああ」

「あ、ア、あん、は、はん。ね、いちかわ、かお、みせて、もっと、かお、みせて」

「ああ、やまだ、ああ、すご、おお、ぐう、う、う、はあ、んむ」

「んむ、ふ、ん、ん、んむ、ん、あむ、れる、はむん、はぶ、あむ」

ちよつとベッドの軋みがすごく聞き取りづらいけど、口吸いながらギシアンしてんのよね？まーお互いの顔を手で挟んじゃったりしながらうっわまた舌先だけでチロチロしてるわ羨まけしからん。

「や、やま、だ、僕、もう、あスーリー、はあ、はあ」

「ん、待って、いちかわ、ゴム、いっこしかな

いから、もっと、もうちよつと、ね？おねが、い、しま、す」

「そんな、こと、いったって、もう、腰が、とまらな、とま、はあ、ああ、うああ」

「やだ、やだ、まって、ンう！んくくえい！」

「うわ」

「は、はあ、この、まま、うごか、ないで、は、はあ」

だいしゆきホールドでガッツリ腰止められてワロタ。どんだけ貪欲なの。あーあもうオキシトシンとドーパミンの虜になっちゃったわね山田さん。

このままいくと来月あたりにはポルチオ開発されて涎流しながらイキ狂ってるんじゃないかしら。市川くんのすでに届いてそうだし。

「はあ、はあ、山田、山田」

「はあ、いちかわ、ぎゅってして」

「はあ、はあ、山田……」

「はあ、いちかわ、いちかわ、ね、このままぐりぐり、してみて？」

「ん、え？ぐりぐり？」

「ん……と。こう、かな？」

「ん？こ、こうか？」

「んくもうちよつと、おつきく」

「ん、ふ、こう、か？」

「ふ、ん、あの、ね。本で読んだんだけど……その……男の人に、三角に動いてもらうといいって……」

「……何読んだんだ」

「……an・an」

「……さ、三角な。こう、か？こうか？」

「ん！そ、それ、いい、そう、そうそう、奥のほう、ぐりぐりされはアン！な、なんか、なんかあ、いちかわ、きもちいい、きもちいいよ」

完全にレイプマンのあの動きでワロタ。あの雑誌そんなこと書いてんの？年頃の女の子なら読んじゃうわよねあれは。しかしその結果が保健室でアンアンいつてんだから草。

「ん……ん……ん……」

「あ、はア。はあ、は、あ、ん、ん。市川、落ち着いた？」

「ああ、けど、どこでこんな、コントロールの仕方、おぼえたんだ」

「ね、市川。今度は私が上になってみたい」

「はあ、も、もう、山田の、好きにしてくれ……」

「やったね。このまま、起き上がれる？」

「いや、無理。一旦抜くよ」ギシ

「はー！はあ、抜かれちゃった……」

「じゃ、山田、おいで」ポフ

「……!!!ね、それもつかい言って」

「?……おいで？」

「でへへ……」ギシ

「はあ、はあ、山田、はやく……」

「うん。こう……かな？」

「そのまま、ゆっくり……」

「ん……あ、は……ん。ぜんぶ、はいったよ

……?」

「ああ……すごい眺めだ……」

「えっと……こっから……」

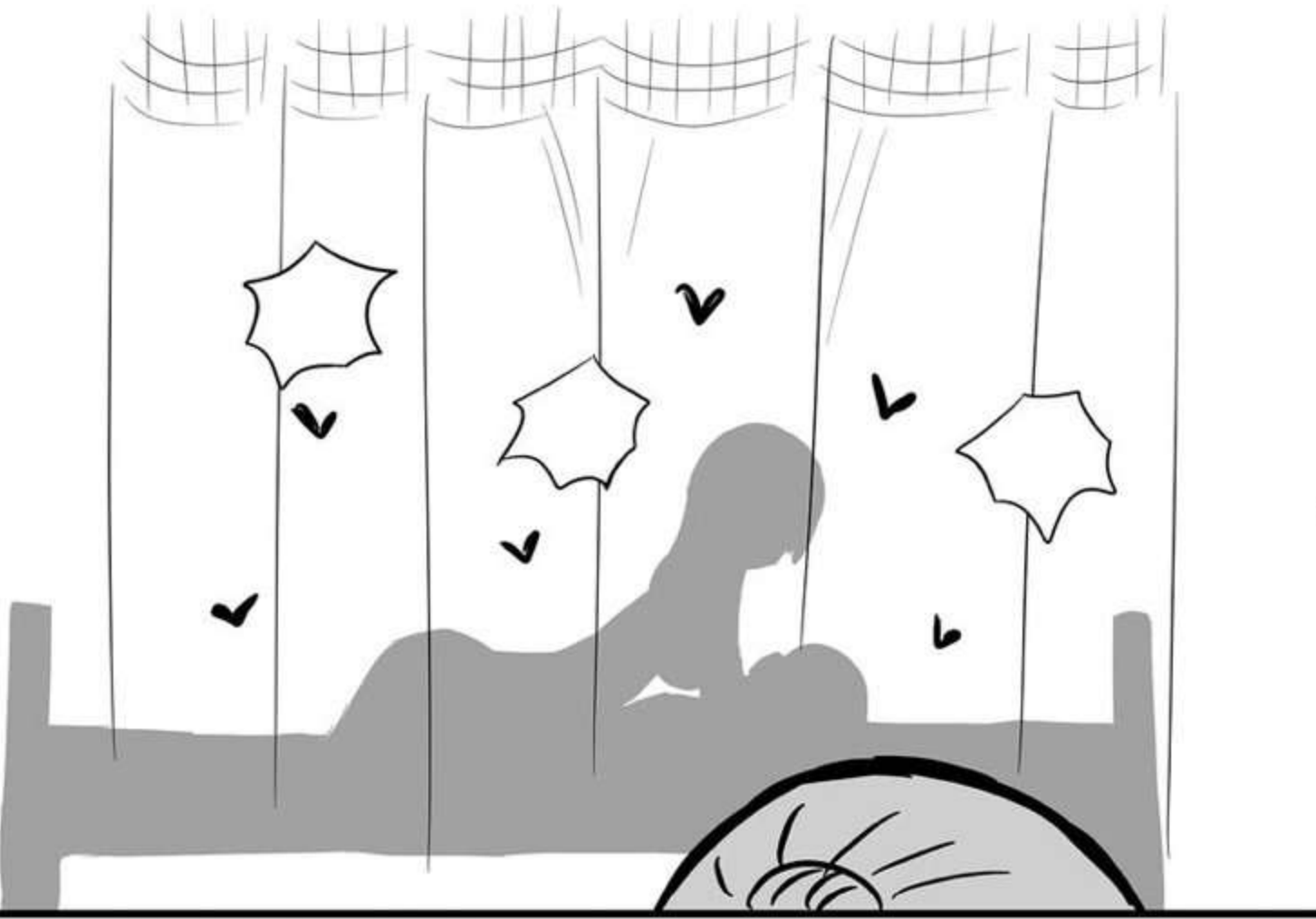
「自分で、気持ちよくなるように動いて」

「うん。やってみるね。ん……ふ……ん……ん

ゝむずかしいな」

「膝……大丈夫か？」

「え?うん、大丈夫だよ。今まで忘れてたくら



い」

「そうか。じゃあ……山田、こう、腰を前後に……」

「ん……こうお？あ、これ、気持ちいいかも……」

「うん……山田、手を……」

「うん。あ、これ、動きやすくなったよほら……はあ、あ。あ。ん。あ、あ、あ、あ、あ、あ、う、ン、ンふ、ン。ン。あっ。あっ」

「そうか、手が、支点に、なって、ああ、もう、なんでもいい、ああ、気持ちいい、気持ちいいよ山田、やまだ」

「は、はあ、んん、は、ん、は、ん、ン。ン。あ、いちかわの、ちくびだ、えい」

「うあ！ちよ、そ、そこは」

「んふ。これ気持ちいい？ん、ん、いちかわの、ちくび、かわいい。いちくびかわいい」

いちくびで吹き出しそうになったけど、呼吸が苦しくなるだけだったわ。

騎乗位で腰思い切りグラインドさせながら乳首いじるとか反則よ。

いちくびくんの反応も嫌いじゃなさそうね。こうやって人は開花していくんだわ。そうよ、これこそが教育よ。知らんけど。

「や、やめ、てくれやま、だ、ぐ、ぐあ、はあ！うあ、あ！」

「ね、いちかわ、私のも、さわって？」

「うふあ、はあ、やまだ、ああ、すげえ、手が、うわあ、あ」

「あ、あ、はん！さ、さきつちよ、きもちい、もっと、さわって、もっと、いじめて」

「うわあ、あ、あ、あ、すげえ、すげえ、手が、離れな、ああ、あああ」

私今、たぶんこの世で一番スケベなシルエツト見てるんじゃないかしら。

それにしてもおっきいおっぱいね。市川くんの手じゃ収まりきってないわ。乳首いじりながらガッツリ揉みしだいてるから負けてないけど。ていうかあの年の子であんだけ揉まれて痛くないのかしら？

「はあ、はあ、いちかわ、ね、このまま、起きてみて」

「え？このまま、起きるって、あ、わかった。ちよ、手を」

「えっと、よいしょ」
「うわ。わふ」

「えへ、これ、してみたかったんだ」

要介護1みたいな起こし方で草。

なんちゅうスケベなパラマウントベッドなの。そして起き上がったら矯正ばふばふモードへ移行と。夢の介護ね。年金全部注ぎ込んでもいいわ。

「ふは、すごい圧だ」

「は、いちかわ、舌、だして」

「れ」

「あむ。んむちゅ。れる、はふ、んむ、れる、あむあむ、むちゅ、ちゅ、ぶあ」

「ぶは、は、やまだ、つば、たらしして」

「え？うん、いいよ、くちあけて？……れくくくくく」

「んむ、ゆむ、あ、ふ、はあ、はあ、んむ、は、あむ」

「んふ、いちかわ、すっごいえっちな顔してる」

「やまだも、な……」

「んくちゅ、えへ、かわいい？」

「あ、ああ……かわいい、い。かわいいな……もう、山田しか見れない……」

「私も、もう市川しか、見てない……んむ」

「ん。んふ、はむ、ちゅ」

「じゃ、動くね。市川は、動かなくて、いいから、ね」

「はあ、はあ、山田……ああ、山田」

「ん、ン。ン。あ、うっ、あっ、アッ、アン！あっ、はっ、はん、あ、あっあっ、はあっ、あっ、あ、あ、あ」

上下運動でベッドのきしみがすごい。壊れたりしないわよ、ね？先に私の精神が壊れそうだけど。

てか、さっき『してみたかった』とか言わなかった？先生聞き逃さないわよ。どうなの山田さん？いや山田？吐け！どこの痴女スパイだ！

「は、あ、ああ、あスー……ああ、うあスー……ああ、ああ」

「ん、ふん、ね、いちかわ、それ、きもちいつてこと？スー……ってやるの」

「ん、ん？え、いや、無意識、なんだが、イキそうなのを、こらえてる」

「じゃあ、きもちい、んだね。んふ。うれしいもつと、感じて。もつと、いちかわ、かわいい顔、みせてン」

「う、あ、どんだけ、スケベなんだよ、はあ、

うあ、すごい、こんな、こんなに、うああ、うああ

「ん、ふ、ん、いちかわ、もうちよつと、がんばって」

鬼かよ。

「あ、そうだ、ね、いちかわ、見ててね」

「え、どした」

「こうやって、こうしたら、どお？」

「うわ、すご、全部、丸見えだ」

「んん、ふん、はあ、はあ、んあ、あ、あ、はん、ん。ん。あ。あ。あ」

ぐわあこれはエロい。

対面座位から後ろ手をついて。

おっぱいがぼるんぼるん上下してるし腰も上下してるし市川くんはそれを特等席で見れるし。なんぞこれ。地獄か。

「はあ、ア、ん。ね、いちかわ、見てる？わたしの、恥ずかしいトコ、全部見える？」

「うわあ、あ、ああ、すげえ、すげえ、胸が、

腰が、ああ、ふあ、う、あ」

「はっ、はっ、はっ、はん、あ、は、あ、あ。

ああ。ああ」

「はあ、やまだ、これ、どうだ？」

「はうん！だ、だめ、そこさわっちゃだめ、だめなの、いや、ダメ、あ、はん！ああ、変な声出ちゃう、だめ、いや、いや、いやいや、んだめ、それだめ、だ……め！待って、それヤバ、ンごい、なんか、なんか、きちゃう、ヤバい、あ……ヤバい、だめン、それ、いちかはうん！」

ここでブリッジ方とか妖怪の類のやることよ市川くん。それクリトリスいじってるでしょ？回春のテクニークを初めてで出してくるとかどんだけエロ本読み込んでるの。

「ああだめ、いち、もう、いや、恥ずかしい、

いや、だめ、いちかわの、指で、イっちゃうから、いやなの、いちかわの、いちかわので、イキたいのにい、いやああああ、あうああ」

「山田、イキそうなのか？いいよ、ほら、イっていいぞ。はむ」

「んむう！くう！ううん！ん！あんん！うあうう、あ、だめ！いや、きちゃう！きちゃうの！ンンだめ！は、う！う、あ！つつくあ！だめ！イグ！いちがイグ！ぐあう！ん！んぐ……つつぐ……つつく、あは、は、あはあ、は、は、は、は

あ、ふ、ふ、ん……ぐ」

ガチイキじゃないの。

辞書で『オーガズム』引いたら流れそうな音声じゃないのよ。ええ？

「がはー、はあ、はあ、山田、いった、のか？」

「ふ、ん……ん、ん……ふ、はふ、ふ、ん、ふ」

ベッドに倒れ込んで痙攣してるのにそのセリフはないでしょ市川くん。

もしこれ演技ならオスカーものよ。エロ部門総なめよ。『総なめ』って単語でもういやらしいけど。

「はあ、はあ、もう、ばか……」

「イキ顔、山田の、すげえ、かわいかった、ぞ」

「ん！もうやだ、恥ずかしい……指といちかわの……でイカされちゃった……」

「あ」

「ん！ちょっと、なんで中で、またおつきく、ンふ、なってるの？」

「そ、そんないやらしいこと、言うからだろ」

「もう、変態さんなんだから……」

「山田も、な……」

「んふ、ふたりで揃って変態さんだね」

「や、山田、もう、いいか？もう、俺、出したい」

「うん。きて、市川。こっちきて、ぎゅーってして、いっぱい出して？」

「山田……」

「はう。ん、ん……ん。ん、ん。んふ……」

「ん。は、ん、んふ、ん」

「やまら、やまら、やまら」

「んう！ん、みみ、だめ、感じすぎちゃうう！

から、だめ、待って、いったばかり、で、す

ご、あう！は、あああ、んあああ、いやだめ、

待っ、はうん！だめ、頭、おかし、くな、ひ

うん！あう！だめ！今！そんな、いや！いや

ああ！あ。あ。あ。あう。あうう。んぐ。

あ。ああ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

ん、あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ、う、あ、ひゃん！待っ、も、だめ、ね、そ

ん、あ、あ、あ。う、ああ、ああん！あたま、

も、なに、も、だめ、おかし、く、な、ふむう

ン。うんむ。あむ、んむ、はむ、はんむ、ふあ、

あ、あ！あ！ああ！あ！あ！あ！あ！う、あ！

ああ！あん！あぐ！うあ！そ、だ、はアン！は、

はああアン！いや、また、いつ、あ、あう。あ

う。あうう。あううう。あ、は、……ゲッホゲ

ホ。ん、大丈夫、夫。ん、ん、んふ、んふん、ん

ふうん。うんむ、いちかわ、くち、すって？は

んむ、あむ、あーんむ。んふ、おいし、い

ちかわ、おいしい。わらしも、いひかわのみみ、

たへてあへるね、むちゅ、ちゅば、んふ、らめ、

にへないれ、ね、んむ、あむん、んむふ、はふ、

れる、ちゅば、れるれるるるるんふふふ、い

ひかわのひひあつふい。ん！や、だめ、待っ

て、待っ、はあ！ん、あ、あ、ん、ん。ん。

ん。あ、あああ。ああ、あ。あ。あ。あ。あ

っ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

出そう？いいよ、いいよ、ナカに、いっぱい、

わたしに、いっぱい、いっぱい、だして、だし

て、ああ、いちかわ、いちかわ、いちかわ、い

ちかわ、あ、すご、いちかわ、すごい、すごい

の、すごいのきちゃうの。わたしも、いちかわ

も、とんじやうよ、あ、あ、あ、とんじやう、

いや、だめ、もう、おかしくな、る、あ。あ

っ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ

のイっちやうイクイクうああイグイ……………
ツツツくあ……………ツツツ！……………!!、…!!!
……………!!……………ケホッ

キーンコーンカーンコーン

んせ、先生、起きてくださいよ。

「んえ？あれ？」

????なに????

「先生、四時間目終わりましたよ」

あれ？市川くん？

あ、体……………動く。時計は、12時21分。たしかに、四時間目が終わったところ。

「えっと……………はっ！寝ちゃってたんだ」

「消毒薬と絆創膏、もらいましたよ。先生そんなところで寝てるなんて気づかなかったんで」

「え、ええ、あれ……………」

「？先生、大丈夫ですか？」

「山田、さん、は？」

「先に教室行きましたよ。給食があるんで」

めっちゃ優先事項で草。

なんだ、夢……………か。いや、夢でよかったわ。いやほんとに。ほんまに！ほんまにな！シヤレならんちゆうねん！人様の夢中でなにしてくれとんねん！

あんなことやこんなこと最後の最後まであれやこれやウフンアハンズツコンバツコンしまくりやがって！

絶対私の下着（しまむらパンツ略してしまパン）びっちょびちよやないか！起きた瞬間遅刻を確信のアレくらい触らんでもわかるわ。糸引くやつやわ。あ……………もうほんまなんなのよ。

「じゃ、先生、俺戻りますんで」

「待って市川くん」

「え？な、どうしたんすか」

「いい？ほんとにマジメに答えてほしいの。誰にも言わないし、言えないから」

「な、なんなん、ですか。どしたんすか？」

「その……………山田さん、と、寝たの？」

「えひっ!?な、なにを、先生、そんなのしてもしてなくてもセクハラですよ！」

「いいから！答えて！おねがい」

「そ、そんなの」

「頼むから」

「そ、ご想像におまかせします!!」ガラララバタン

「ちよ待ちなさ……………」

あーね。あの言い方は100%やってない時のあれね。

じゃ完全に夢だったんだわ。

そらそうよ。

あんなことあり得ないものね。

サンキューイッチ。

はー安心したわ。巨人を出る喜びってこんな感じなのかも。

ズスー……………はあ、コーヒーうめえ。もう冷たいけど無性にうまいわ。ちな下着びっちょびちよ。

さ、給食室にでも行って、今日は鯖の塩焼

き？

なにこれ。

なんか落ちてる。

どっかで見ただギザギザ

もしかして

何て書いてあ

サガミオリジナル

〈おしまい〉





◎ 付き合っている時空。

◎ しても責任がとれるぐらいの年齢。

◎ 両家公認。(重要)

◎ 2020年12月時点の本編での進展具合から

妄想して作った初体験マンガです。ご了承ください。

マギラー



あまのこの
ラーメン屋
美味しかったんですよ。

リンガー
借りるわ。

まよな。

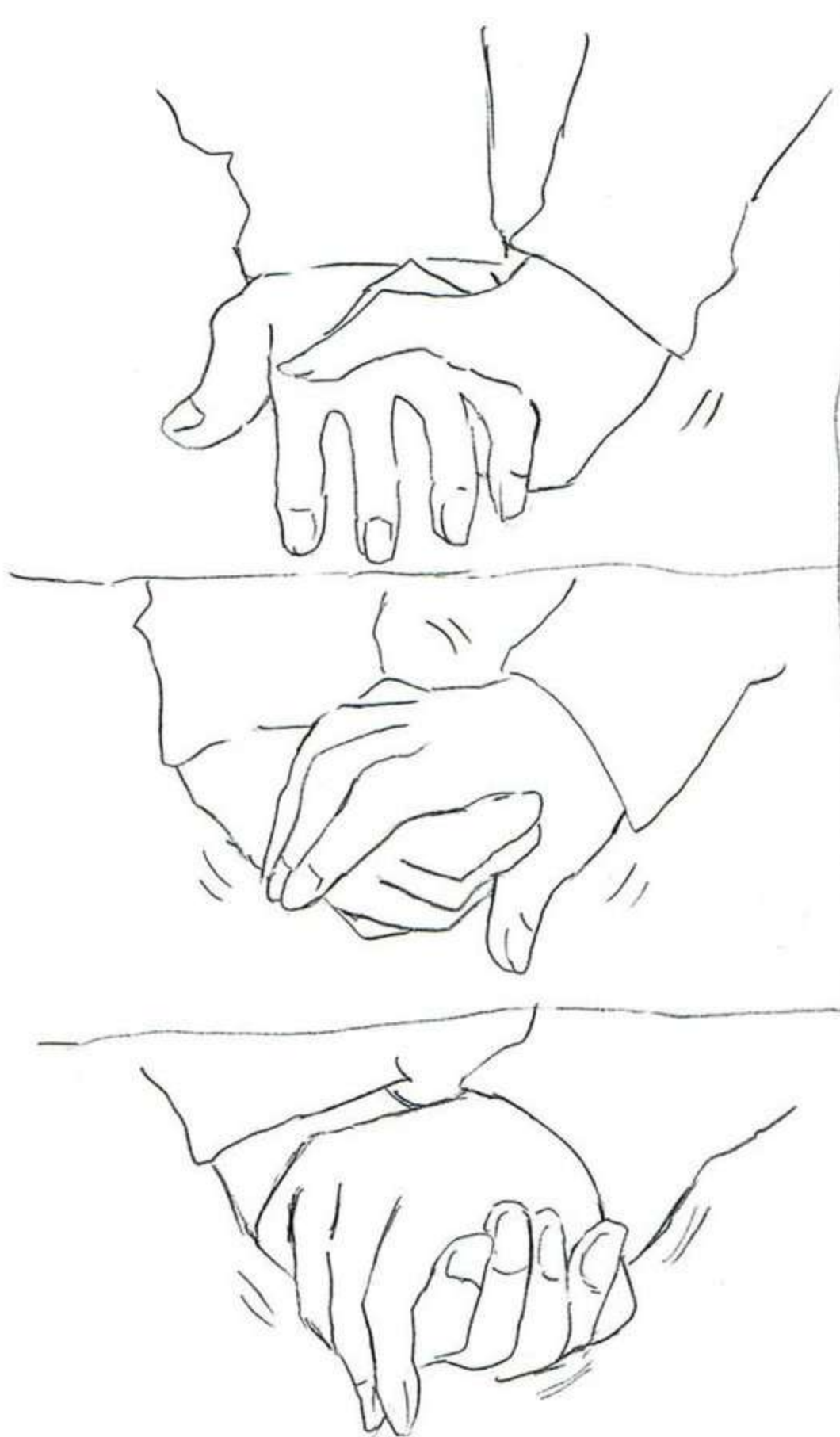
あ！
スミッチ
S M I T C H あま
一緒にやろ！

あ。
あ。
あ。

小学生か

※市川の部屋。

ふー





Aトランク
和牛ステーキに...



特上カルビ
土人前!



ごんごり

あー...

黒トリュフのせ
フォアグラステーキ
キャビアをもえ...

アフリカ



今度
連れてってね...



...わかった

約束だよ



よく
覚えるね。

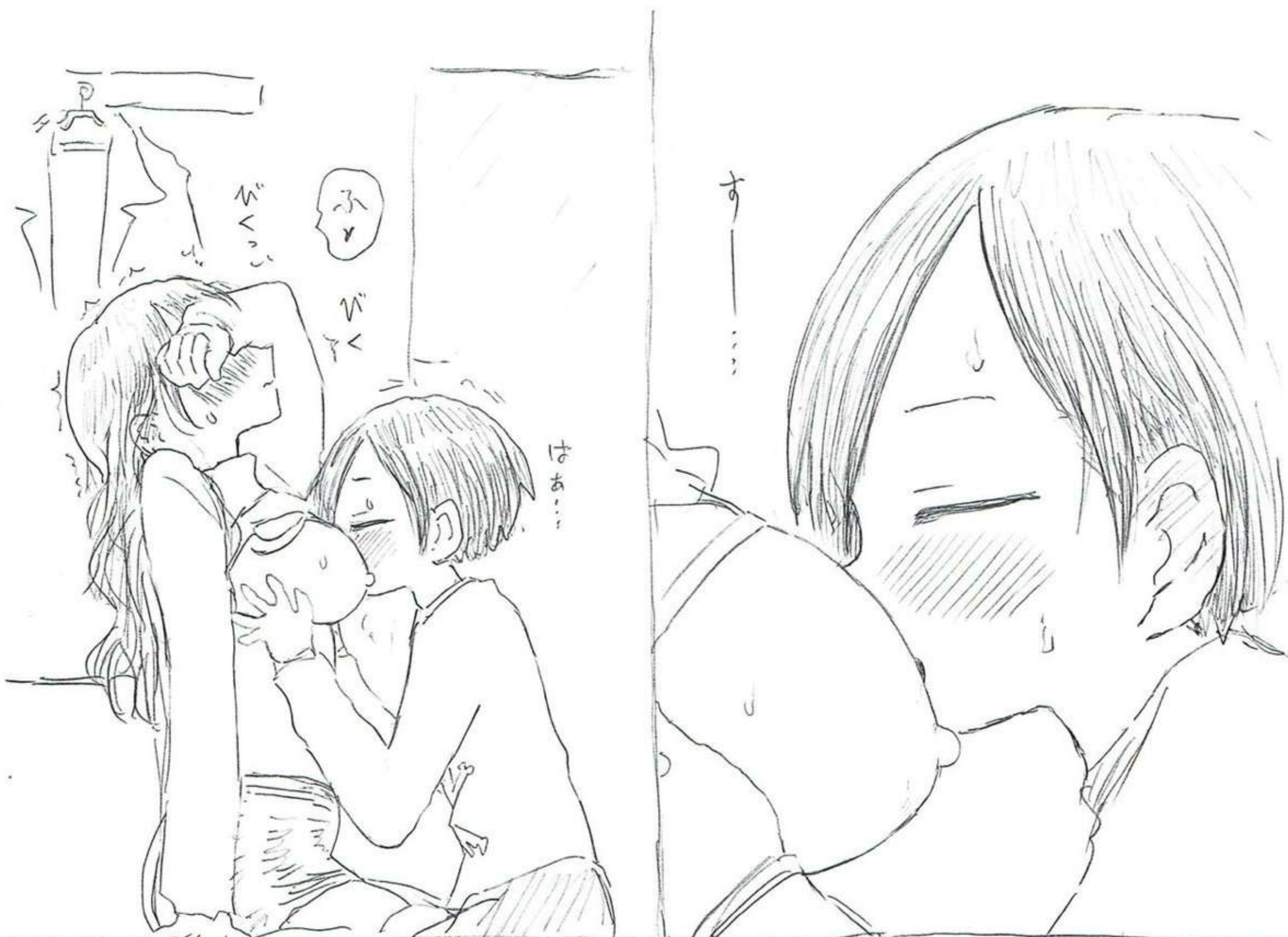
ま、ま女な

↑ 試してみたいもの
はあがしい。









は
初めてだから……

このまま、いったら
山田を（めす）ちゃうから
してしまおう……

僕は……

ぬえ……

もしかして
元気……
無くみっちゃうかな？

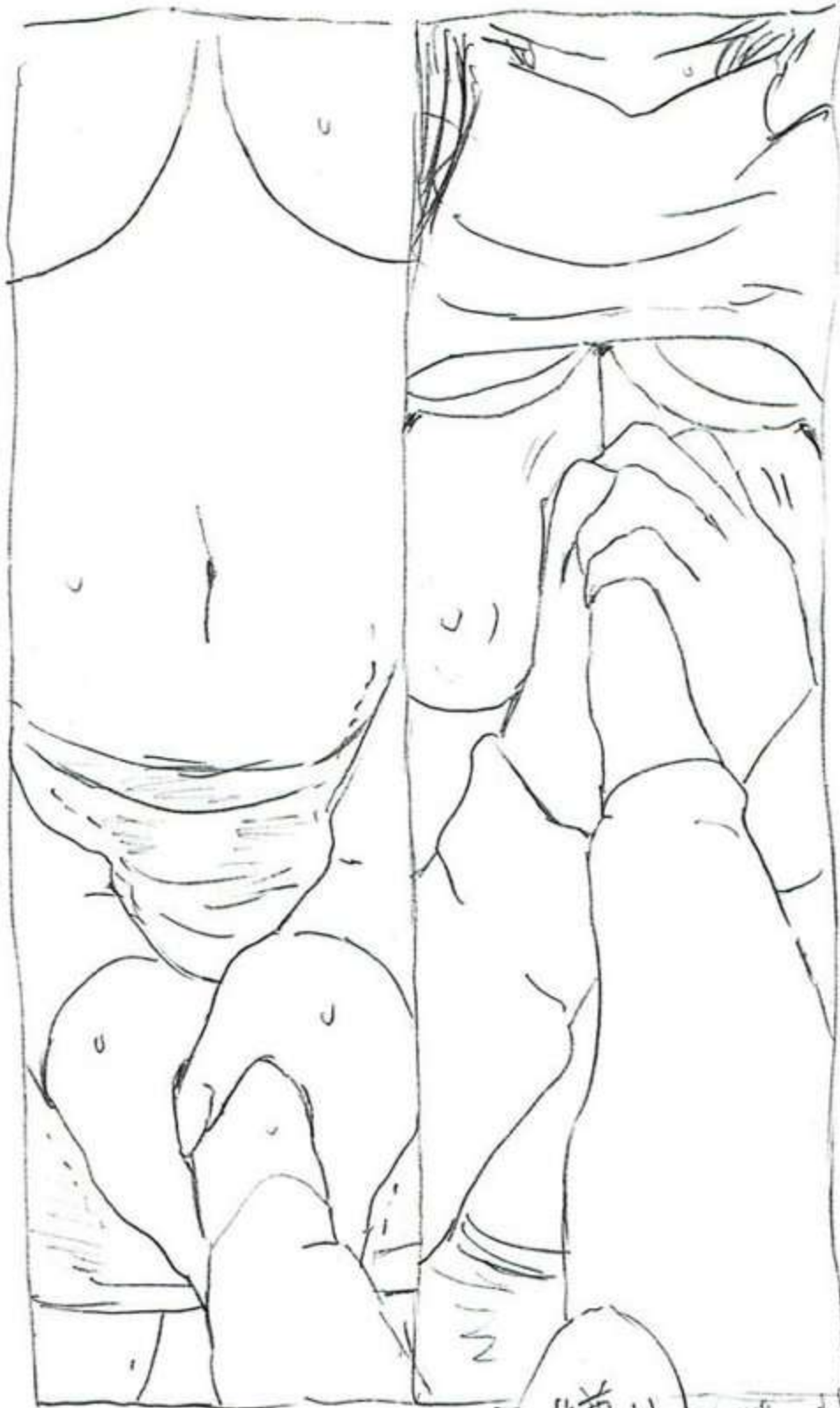
にや……

た大切に
したいんだ……

くそ……
はち切めそうだ……
(股間)

もう命令……

まっ
ん
ぐいっ
っ



優しくして
もらったかか



嫌
い
か
?

温
い
...

今日ぐらいは



田
子

あま...
あま...
あま...



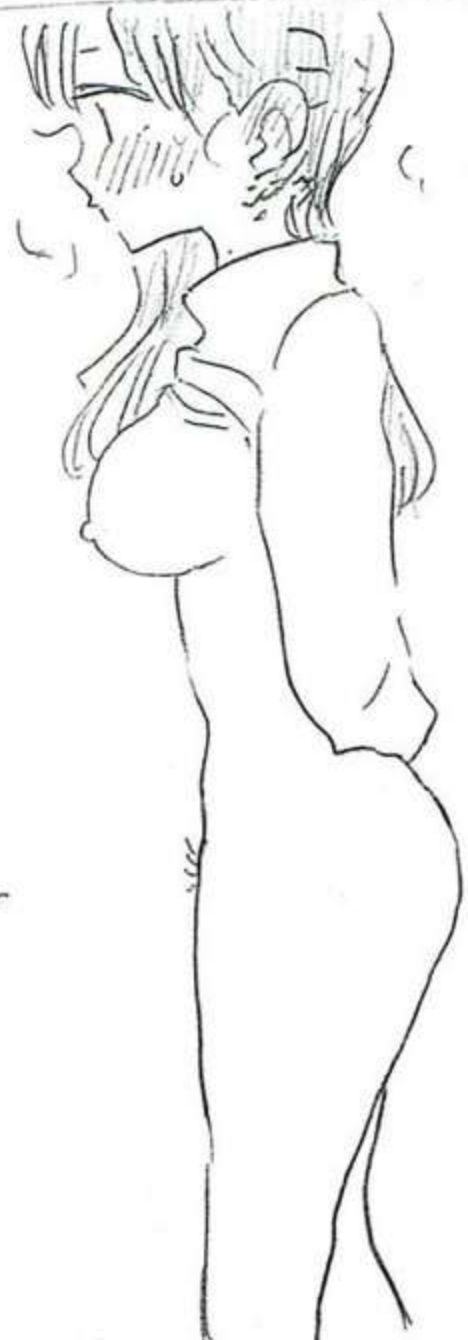
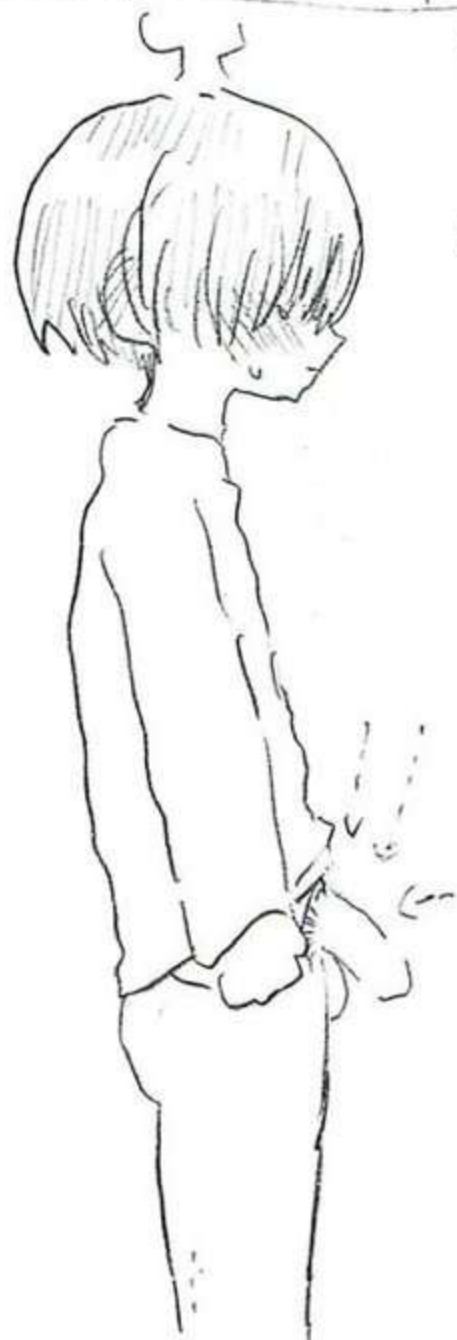
私
も
め
ち
ゃ
く
す
ち
ゃ
し
て
？







死にたい...



こーなってるんだー...







痛かっただ
言えよ

平気!

はあ...

入ったか
...?

わかんない

あ

待って
手元が滑り

ブ
っ
...

入
っ
...

はいっただかも

このまま
押すを

っ
ん
...

ズブ...

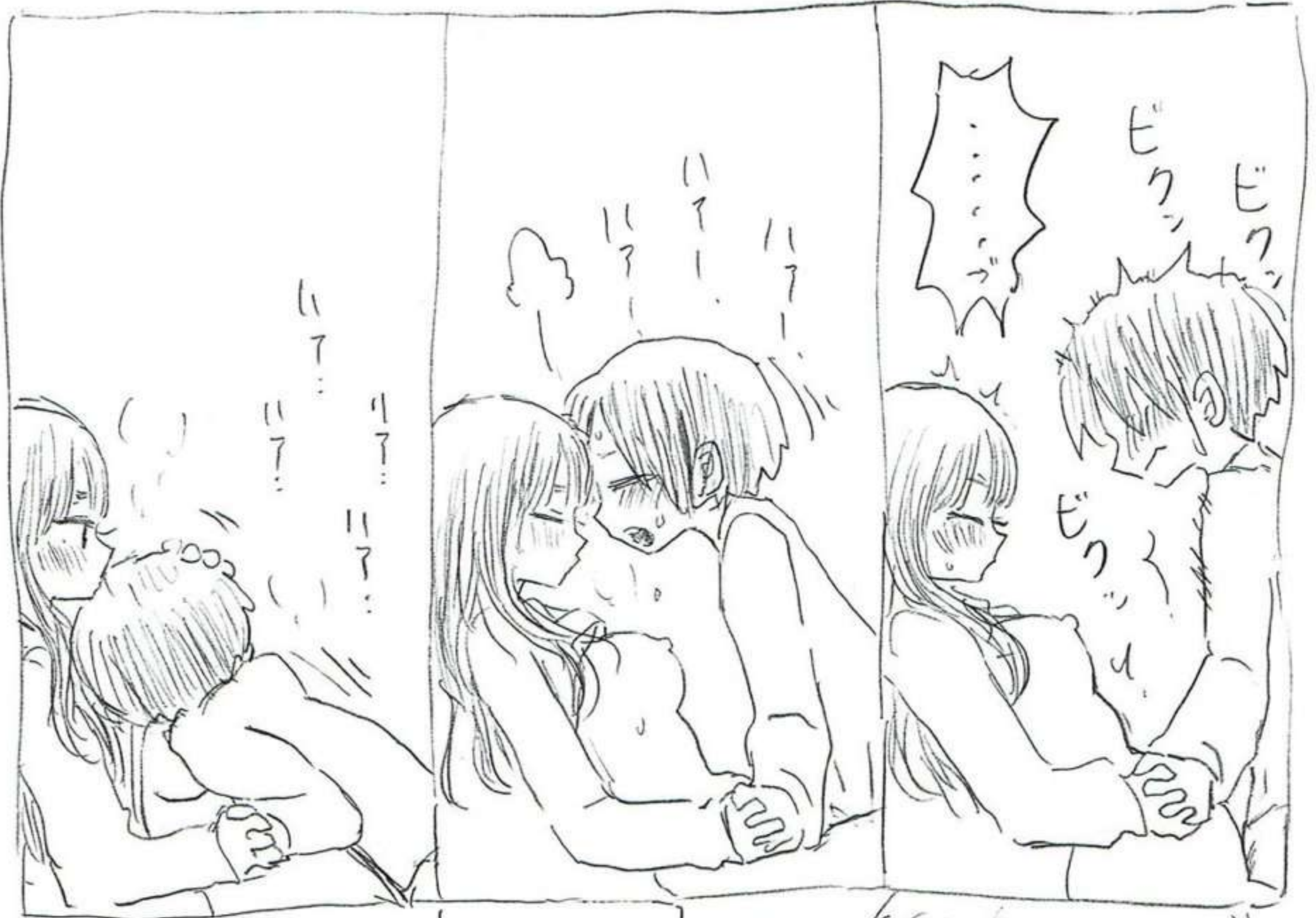
ん
ん
...

た



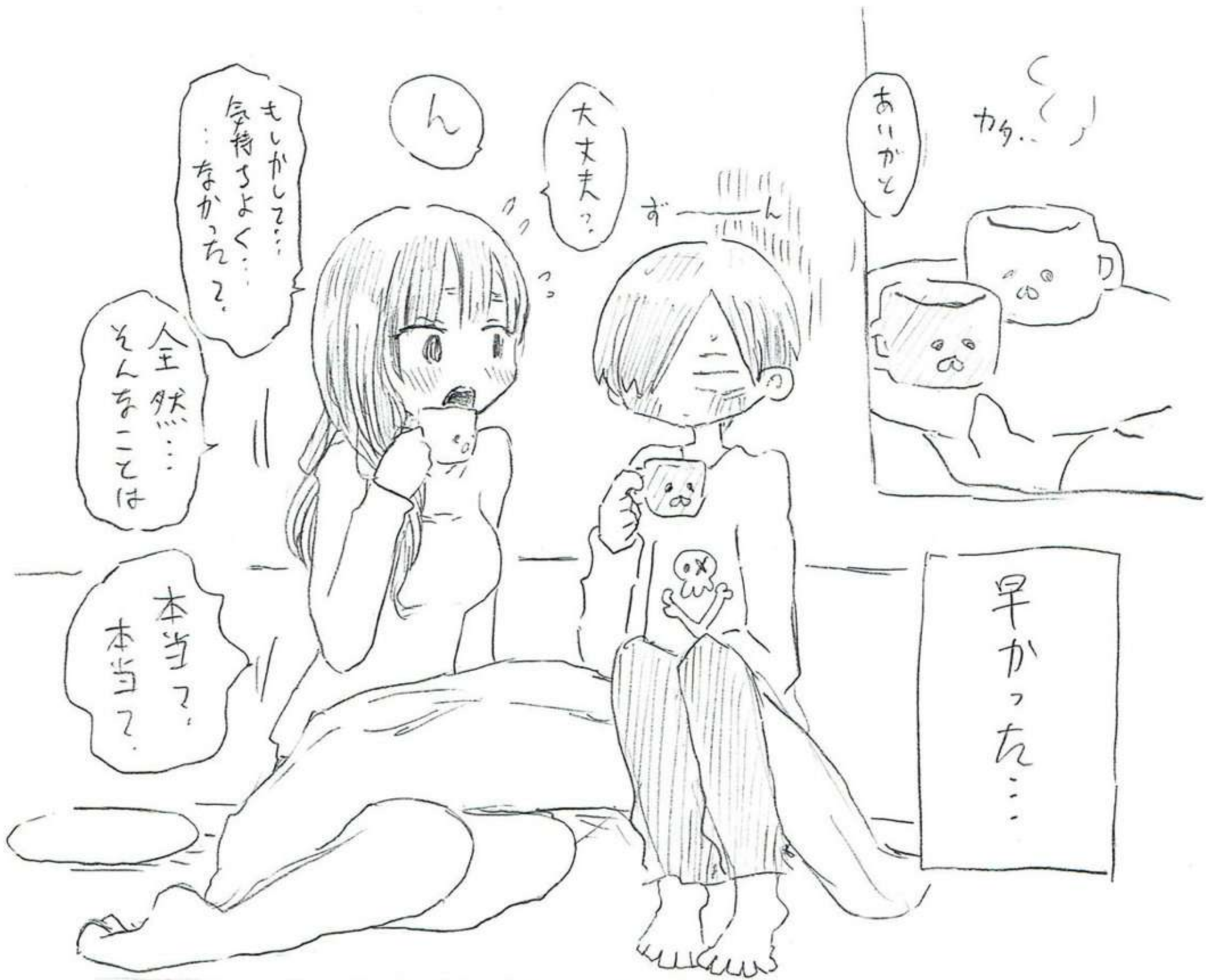






毒人量





☆と見せかけて...

(20字)



証の
対抗意識

だって市川をけ
キモ干... 良くも悪くも
ふ... 不い平たし...

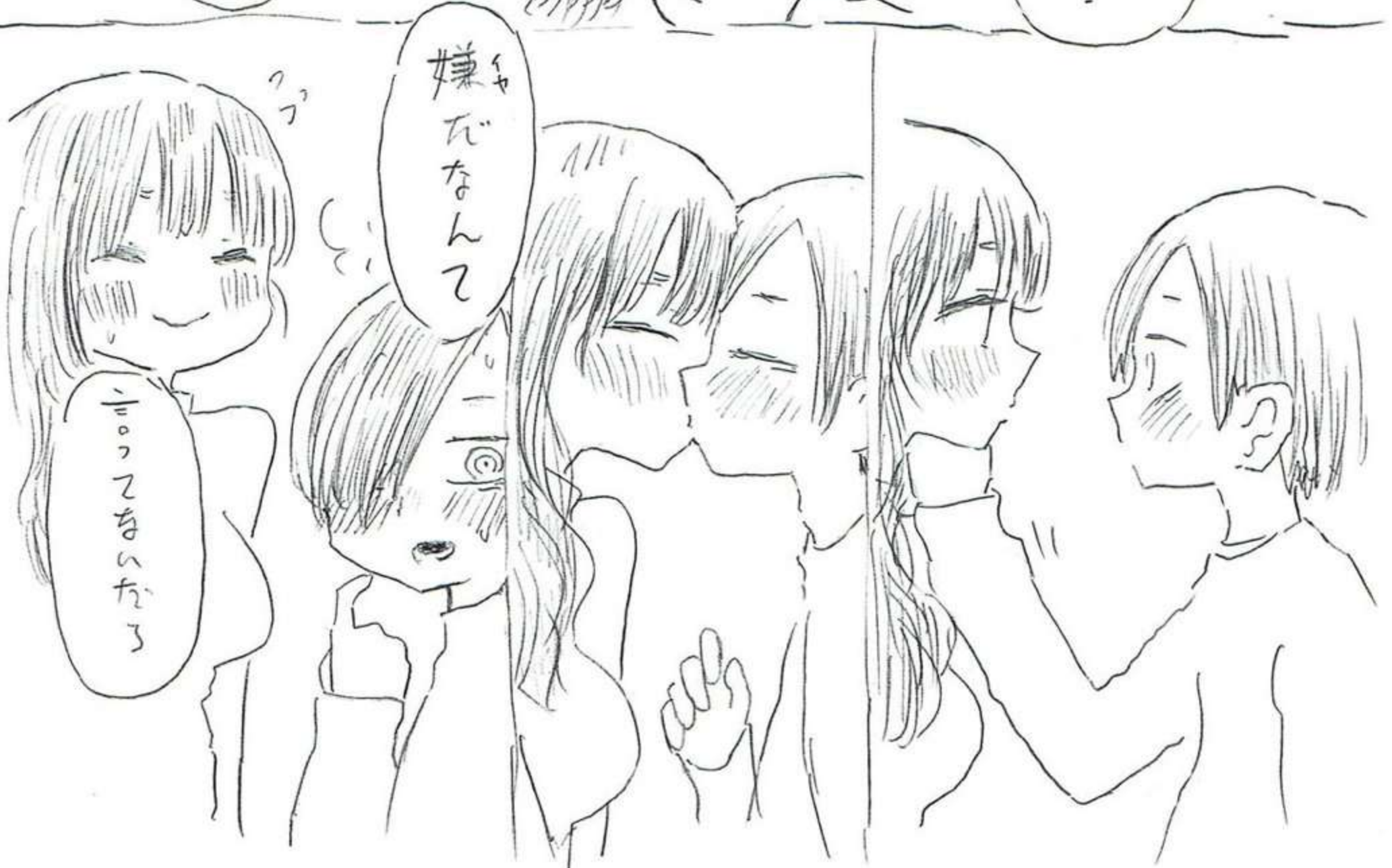
え...
どうする？

もっかいする...

!



市川が
嫌な...

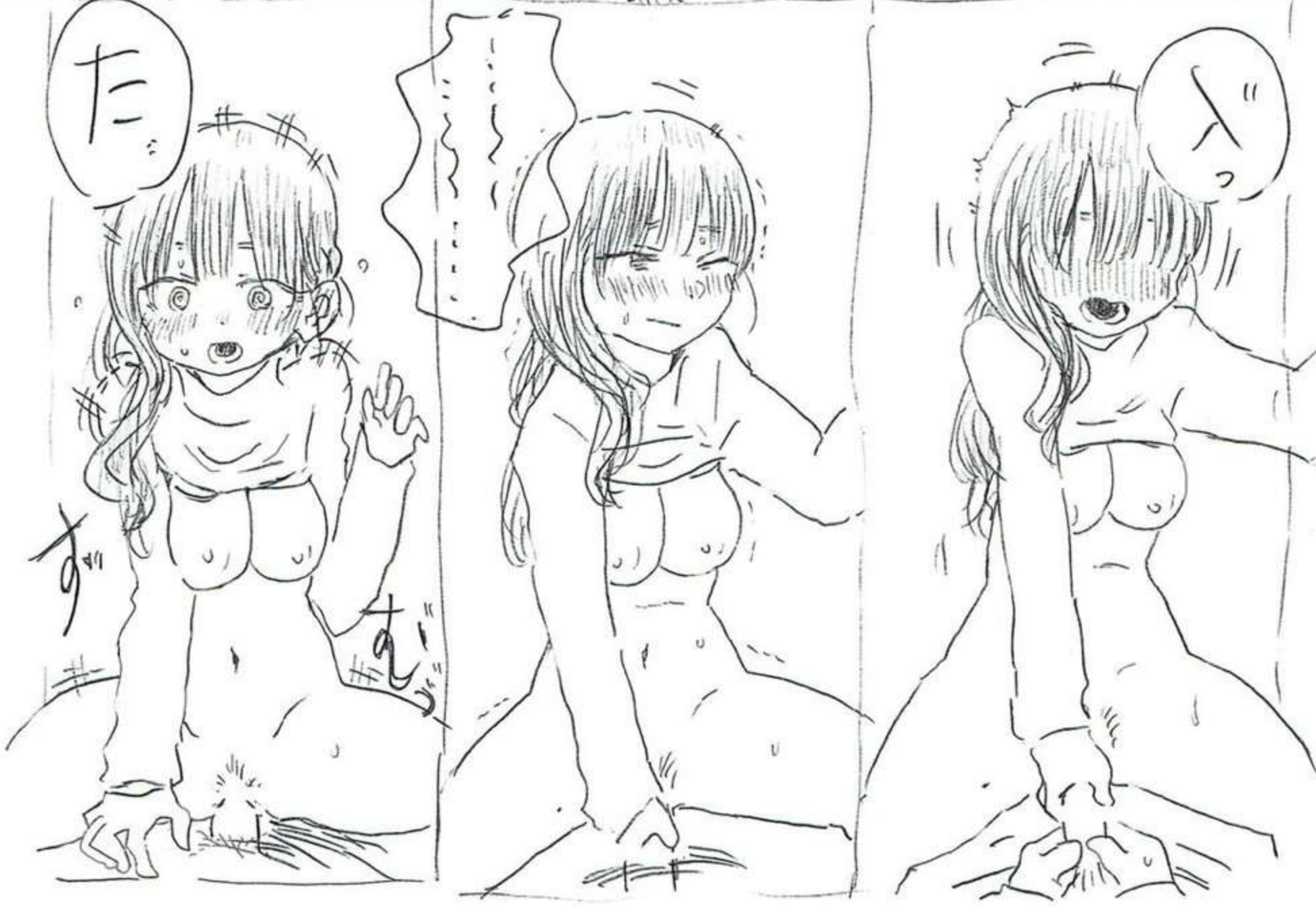
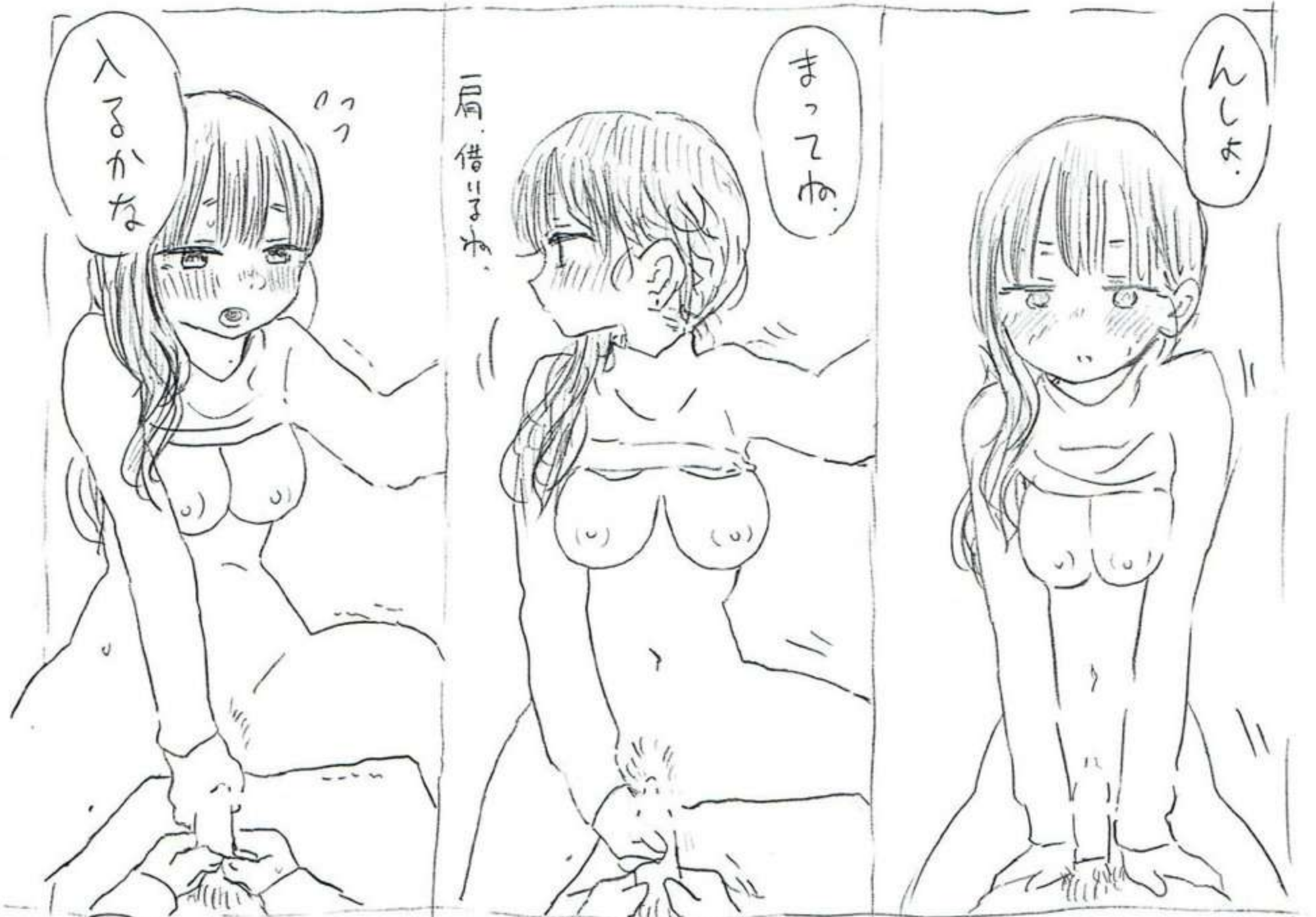


嫌ななんて

言ってるなれたる

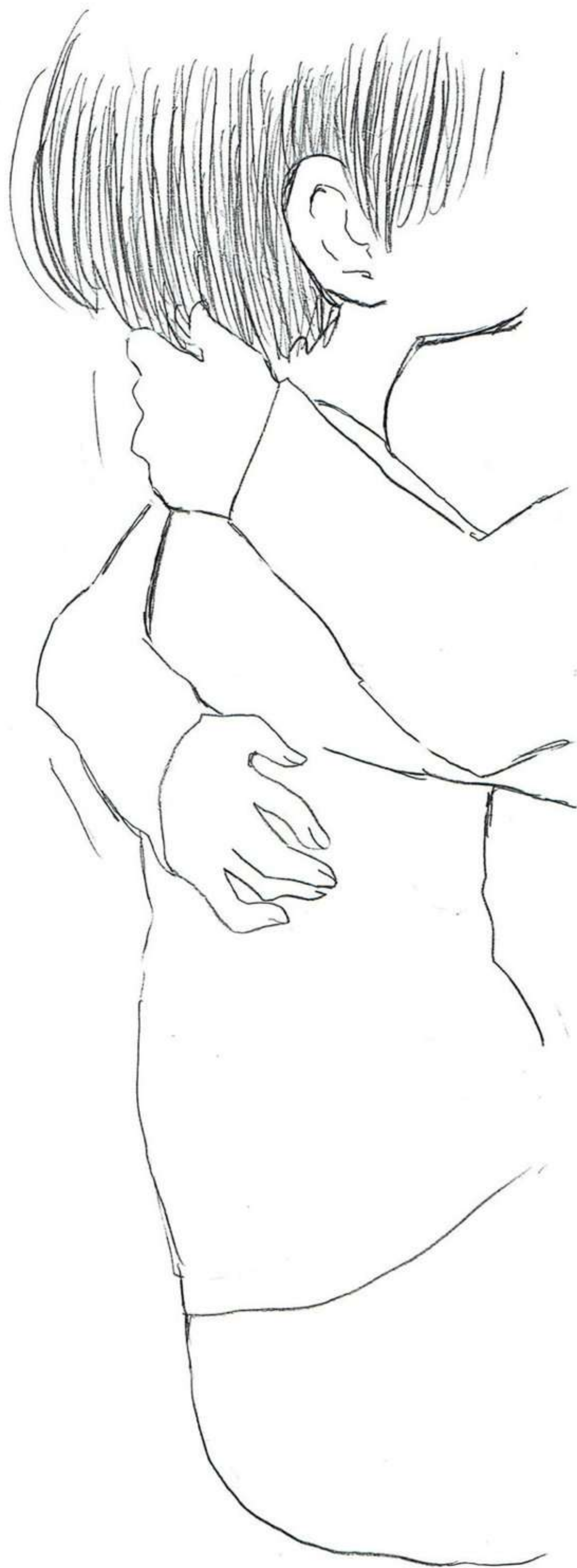
言ってるなれたる













◎ 今度こそおしひい。

天気予報を信ずるならば、週末の好天はほぼ約束された金曜の午後のこと。終礼が済んだばかりの教室は、明日から春休みに入るわけでもないのに、不思議と浮かれた雰囲気で満ち満ちていた。

普段なら部活や家路に急ぐ生徒もなぜか教室に留まり、ペチャクチャとどうでもいいことを喋っている。みんな土日はどこかへ遊びに行く予定でも立てているのだろうか。天気の良い日に遊ばぬ子供というのも不健康だし、まあそれは結構なことだと、僕は上から目線で教室を一瞥し、帰り支度を整えて教室を出た。

僕の週末のカレンダーは当然のように真っ白で、わざわざ書くまでもない読書やゲームで時間を潰し、見てくれと言わんばかりに広がるであろう真冬の青空をそれほど眺めることもないまま、気だるい月曜の朝を迎えるのが容易に想像できる。ああもう、想像しただけで陰鬱だ…。

「いちかわっ！」

トボトボと力なく廊下を歩いていると、僕を取り巻く瘴気を吹き飛ばすような、とても耳障りのよい声が猫背に叩き込まれた。この数ヶ月、家族の声よりも多く聞いているといえる程度には親密…いや、少し距離が縮まった山田の声だ。

「お、おう…」

対して、僕が満足に喋れているかは別問題としてほしい。中二の魂、成人するまで変わる気がしない。とはいえ、一生このままだと思っていた頃と比べたら、ずいぶん成長したものだ。

「先に帰らないでよー。一緒に帰ろっ！」

満面の笑みを浮かべてそう言うと、山田の柔らかな手は僕の右手を絡み取り、お互いの歩幅

の差を気にも留めず、グイグイと力強く昇降口へと引きずっていかうとする。踵が軽く宙に浮き、つま先が地を掠める。美しく磨かれたリノリウムの床に、上履きのスリッパ痕がつくかという頃合いになって、ようやく僕はその手を強引に引き剥がした。

「痛っ」

「え、あ…そっか！ こっちケガしてた方だった！ ごめんっ、ごめんね！」

年末に秋田でヤンチャした時に負った若い古傷が少し痛み、思わず声を上げてしまった。実のところ、もうほとんど痛くないのだが、こういう傷のひとつやふたつ、自慢にしてみたりするものだ。

山田は何度も謝りながら身を翻し、僕の左手を握ってまた同じように引きずろうとする。今度は歩き始める前にサッと手を引っ込めた。

「あれ、左は大丈夫：だよな？ 私、なんか市川に嫌なことしたかな：？」

ご機嫌な顔にスッと不安が差し込む。別に不機嫌なツラをしてるつもりはないが、元から陽気な表情などできない顔だ。二度も強引に手を離されたら、ポジティブオバケの山田とて怪訝な顔になるのも自然だろう。

「別に嫌じゃないけど、スキンシ：違う。あの、こういう友達っぽいのは気持ちの準備が：な」

僕は大きく拍動する今の気持ちをストレートに伝えた：つもりだ。多分うまく伝わってないが。

正直、僕の異性とのスキンシップは、同世代の男子が見たら羨まれるほどに過剰な方だろう（おねえから受ける一方的かつ厄介なものだが）。

しかし、昨年末から新たに加わった山田からのスキンシップは、女子という生物学上は同じ立場であるおねえから受けるそれとはまったく違う、触れられた場所とは無関係な部分まで反応してしまふ不思議なものだった。

最も現れやすいのは下半身の勃起だが、それ

は多くの男子中学生なら足し算より簡単に理解できるだろうから置いてくとして、今は握られた手から遠く離れた目の周りや頬が、じんわりと生温かくなっていく感じがするのだ。山田との接触が嬉しくてたまらず、蛇の神経毒にやられたかのように表情筋が弛緩しているのだろう。もう幾度となく山田に触れられているが、一向にこの淫靡な毒への抗体が体内に作られる気配がない。

もっと堂々と手を握り、男らしくエスコートしてやれば、山田だって安心してくれるかもしれないが、それは妄想上の山田の設定だし、そんな自惚れたことしたら引かれるに決まっている。現に、今の僕は薄気味悪いニチャアとした笑みを表に出さないよう必死に抑えるのが精一杯で、行動に移したとて取り返しのつかない結果になるのは目に見えている。

なにより、ここは多くの目がある学校だし、未来ある芸能人の山田が、陰キヤの僕とそんな仲だと勘違いされるわけにはいかないのだ。

「まだそんなこと言ってる。友達っぽいじゃない、私と市川は友達でしょ」

「あ、ごめん：。そう、ともだち：友達だけど、ほら、山田は人気者だし、女子だし：」

言い訳をするうちに、ますます自分がどんな顔をしているのかわからなくなってくる。やさしい山田がこうやって僕と仲良くしてくれる事実を反芻し、ますます弛む表情筋を引っ張ろうとして口角が痙攣してしまう。嬉しさと不安の綱引きだ。

「それに：まだ学校内だし：」

「えー。誰もいないよ？」

確かにあたりを見回せば、各教室から絶え間ない喧騒が漏れてくるものの、不思議と廊下は下校を急ぐ生徒もおらず、僕らだけがポツンと佇んでいた。それはそれで幸いなことだが、誰かが陰からこっそり覗いている可能性だ。十分にある。山田のブランドを守るためならば、微塵の油断も禁物だ。

「い、今は偶然いないだけで、みんなすぐ出てくるだろ。俺なんかと手：繋いでるの見られたら：なあ：」

「えー、その時はあー、んー： んんんん？」

「そ、そんなに悩むこと：？」

「だってえ：。んんんん：」

山田は目を閉じて腕を組み、口を歪ませながら唸っている。いつも直感で行動している可愛い生き物が珍しく長考しているのを眺めているうち、ぱらぱらと生徒たちが教室から出てきて、廊下は平時の騒がしさとなった。何人かの女生徒が声をかけてきたが、当の山田は唸ったまま無反応を貫いていた。

「ほら、もう帰るぞ」

「んんん、うん。んんん…」

駐輪場から愛車を持ち出し、他の生徒たちに僕らが寄り添っていることに感づかれないようリーダーを張りながら通学路を歩き、いつものファミマまでたどり着いても、まだ山田は悩みの只中にいた。レジで迷わずあんまんを買ったところを見るに、決して買い食いのチョイスに悩んでいたわけではなさそうだ。

悩みのタネが僕との接触とあっては不安が先立つが、山田がこんなに僕のことを真剣に考えてくれているのなら、それもまた悪くないと思ってしまうあたり、僕はマゾなのかもしれない。マゾは温かい焙じ茶を買い、先に店先で大口を開けてあんまんを食べ始めていた幼い女王の隣

に立つ。

「んっ！ 私、決めた！」

「おお：長かったな…。ようやく糖分が脳に届いたか？」

何を決めたのかは知らないし、悩む姿もまた可愛いとは思ったが、ずっと眉間にシワを寄せてるのも山田らしくないし、それがどういう決定であれ、僕は少しホッとした気分です。ペットボルの焙じ茶を口に含み、頬を内側から温めた。

「市川っ、私と身体の触りっこしよ！」

「へえ……………ブフウ……………ツ!!」

突飛な提案に思わず納得しかけた後、少しの時間を置いて、比喻でもなんでもなく、僕は霧のように茶を吹いた。カンカン照りの夏場だったら、きらきらと美しい虹が見えただろう。しかし、お茶農家の皆さんに申し訳ないことをしてしまった。

「だ、大丈夫!? ハンカチ、はんかちは…」

「ケホッ、ケホッ…持つてる…ハア…ファ…」

通りすがりの主婦数人が心配そう、いや怪訝な目でこちらを眺めている。おいおい、こんなの見せ物じゃねーぞと言いたいが、今のお茶吹きは我ながら見事だったので目を引いてしまうのもわかる。ふいに現れた新進気鋭の大道芸人として目黒マダムたちからおひねりを徴収したので、ひとまずこの場を離れてもいいだろう。か、いや一刻も早く離れて心を落ち着かせたい。焙じ茶にまみれた顔を使い古したタオルハンカチで拭い、荒れた息を整え、僕は山田からの提案にゼロ回答を示して早足で自転車を転がし始めた。

「あーん、待っへー」

食べかけのあんまんを強引に口内へ押し込み、スタスタと大股で山田が後からついてくる。

職業モデルの売り物であるその長く健康的な脚は、このところ僕を見つけると瞬時に目の前へ飛び込んでくるという極めて無益な行為に活用されていることが多い。

「ごめん、説明不足だったよ。怒ってない？」

「別に怒ってないが」

そう、決して怒ってはいないが、かといって今どういう感情が湧いているのか、僕自身もよくわかっていない。河川敷に棄てられたエロ本を興奮しながら見ている少年たちの前に、その本を彩るヌードモデルが煙と共に現れても、きっと少年たちは恐れをなして逃げてしまっただろう。どうしていいのかわからないのだ。喩え話ですら混乱してしまうほどののだ。

「よかった。あのね、私は友達の身体のどこを触っていいか、ちゃんんとわかってるんだよ」

「へ、へえ…」

最近ようやくわかってきたことだが、僕がほとんど嫌がる素振りを見せないからか、山田は一度触った相手の身体のパーツを以後自由に触ってもいいと思いついてるふしがある。バイオリズムを無視した常連客に撫で回される猫カフェの猫のようだが、僕が猫以上に繊細、かつ脆い存在であることを山田はまったくわかっていないようだ。

男子中学生というものは、女子の手が触れたら最後、そこが新たな性感帯になってしまうという、かくも難儀な生き物であり、そこに「好きな女子」というマタタビの如き依存性のある

ドラッグが加わったらどうなるか、ちょっと考えればわかるだろう。

既に毎日のように与えられているマタタビに対して、夜な夜な禁断症状を起こしている僕に「触りっこ」だとか、そういう若者向けのゲートウェイドラッグみたいなカモフラージュで悪事に誘うなんて、芸能人の考えることは甚だ恐ろしい。いや、当の本人はドラッグだという自覚無しに薦めてくるのだから、なお恐ろしいのだ。

「でね、ちいも私の触っていいところダメなこと、全部知ってるの。だから、私たちは手を繋ぐだけじゃなくて、おんぶしたりー、椅子になったりー、いろんなことができるんだよ」

「ほお…、それは仲がよろしいことで…」

下手したら姪っ子に見られかねない幼さを残す小林と僕を並べて語られるのはなんとも悔しいが、皮張りのソファに潜み、人間椅子として山田に身を預けてもらいたい欲求を抑えて受け流す。多分、山田が考えているのはそういう卑猥なものではないはずだ。

「市川ってさ、私の触っていいところ知らないでしょ？ 地図を持たないでハイキングするのが

怖いのも同じで、持ってる情報が少ないから手を繋ぐだけでもビクビクしちゃうんだよ」

「いや待て。もっともらしいこと言ったつもりだろうが、ちょっと論点がズレてるぞ。手を繋ぐのがダメってわけじゃなくて、誰かに見られたらどうすんだって話だっただろ」

「それは…市川が堂々としてれば、市川さんと山田さんは仲良しこよしなんだな〜ってみんな思ってくれるよ」

「ハア!？」

思わず、自分でも驚くほどの大声が出た。そりゃ堂々としていたのは僕とて同じだ。でも、それは永遠に叶わぬ夢であって、達成されてはならないことだ。

うちの学校は頭にチューリップが咲いてるよ
うなアホばかりのお花畑ではなく、やたらと察しのいい関根さんや原さんもいるし、手を繋いでイチャイチャしてる男女が「これぞ友情!」と叫んでも納得されるはずなどない。納得するような輩がいるなら、中学生として逆に不健全だから保健室に行った方がいい。第一号患者は目の前のこいつだ。

来週の昼休みは図書室で勉強ではなく、保健室でカウンセリングをしてやることにしよう。

ベッドが空いてれば、そこで僕が身を挺して
渾々と：ああつ！

「それはダメだ!!」

「……市川ってそんな大きな声出せるんだね」

「あ、ごめ……。あの：なあ、その：なんだ。世
の中、そんなに甘くないんじゃないかな……」

「うーん……今は世の中じゃなくて、私と市川
のことを話してるんだよ」

「世の中の評判こそだろ。芸能人なんだし」

「ん、もう、だからあ、私たちがあ……こ、これ
からは……手を繋いだり……ハグしたりする以上の
関係に……なろうよって話なの……」

「……へ？ フフへ？ そ、そうなの？」

しまった。

ふいに示された甘い未来予想図に、珍妙な喩
え話などでいつも以上に引き締めていたはずの
僕の理性の紐は、締めすぎた挙げ句にプツンと
切れ、なんともキモい笑い声が口から漏れた。
ハグ以上の関係……って、いくらなんでもヤバ
イんじゃないか？

もちろん、そんな甘い関係を意識してなかつ
たわけじゃないし、なんなら授業中でも夢想し
ていることさえあるが、それはお互いのためで

はないと日々思い込んで己を律し、言えなかつ
た言葉、伸ばせなかった手を供養した後、自室
のゴミ箱にティッシュの山を作っているのだ。

でも、山田の方からそれ以上の関係とか言わ
れたら、のらりくらりと話を逸らすなんて、僕
の人生経験では無理だとしか言えない。猟奇犯
罪者の人生はいくらでも知っているが、自分の
人生なんてたかが知れているのだ。

「わ、笑わないでよお。市川とはいつでも手え
繋ぎたいんだからあ……」

勘弁してくれ。それはこっちの台詞だ。

世の中さえ許せば、僕だってそうしたいに決
まってる。その柔らかな手を握りながら、その
胸に抱かれながら眠りに落ちたいと、僕が毎晩
のように願ってるなんて、きっと山田は知らな
いだろうし、今は知られたくないんだ。

あと、そのふてくされた顔で甘ったるく語尾
を伸ばさないでくれ！ その……なんだ……可愛
さるんだよっ!!

「それにさあ、お互いの触っちゃいけないこ
を知ってた方があ……今後……のためになるでし
よ？ NGワードと同じだよ」

「ほ、ほうほう……なるほどなるほど。そつ、
そういえばさつ、今週のコロ学つ、山田ほとん
ど映ってなかったよな！」

「えっ！ えっ!! 観てくれてたの!? ありが
とう!!」

「お……い……今のは、あえてNGを踏んでみたつ
もりなんだけど……」

「へ、そうなの？ 観てくれるだけですつごく
嬉しいのに。やっぱり市川は私の触っちゃダメ
なところ、ぜんぜんわかってないね」

「くっ……」

口元に指をやり、にんまりと歯を見せる。

ちよつと空気を交えるためにも、僕らしくな
い薄氷を履むが如き冒険をしたつもりだったが、
そんな勇気も山田の天真爛漫さの前ではちっぽ
けなものだ。出演シーンがカットされてたこと
を気に病んでいたのは僕の方だし、気に病むほ
ど山田のことが大好きなのも既にバレてしまっ
ている気がしてきた。

「あつ、でもさ、市川も少しは知ってるよね、
私のダメなところ」

「んん……？ げ、逆鱗とか？」

「それは確かに触れてほしくない……って、そう

いうんじゃないくて、前にさあ、黒板消してくれ
たじゃん？」

ん？ あ、あー、足立が日直だった日の落書きのことか。あのセクハラめいた絵が他の男子に見られてしまったのは、山田のブランドに傷が付くし、人目に晒される前にさっさと消したんだった。

とはいえ、あんなセンシティブな絵を事細かに覚えてたらキモすぎるだろ…。

「そんな絵、まったく記憶に無いな…」

「絵だってわかってるじゃん。あれを私たちで共有しようってことだよ」

「…や、やっぱり思い出したわ。あれ、ぜんぶ覚えてる、ごめん…」

披露したくなかったキモい記憶力を頼りに、切れた理性をなんとか結び直そうとする。

いくら気を許してくれてるとはいえ、そこを堪えるのが健全な中学生の在るべき姿だし、僕のような陰キヤが踏み込んでいい領域ではない。触りっこなんて破廉恥なお遊びは、僕の脳内で持ち帰り、今宵の手慰みで昇華させてしまおう。それがいい。

しかし、山田はそれを許してはくれず、自転車のハンドルを握り、強く迫ってきた。

「そうじゃなくって！ あれはただの参考資料なの!! いち…今のじゃないの!!」

「い、今の…？」

「社会は常に変化してるんだよ！」

「山田の気分は社会なのかよ」

少なくとも僕にとっては、山田こそすべての規範を差し置いて優先されるべき社会ではあるが、時には社会に物申すことも必要だ。ただ、山田の気迫の前に、今はそんなことできそうにない。なんと民意はか弱きものか。

「ハグする時も市川のダメなところ触らないようにしたいの。嫌われちゃったら悲しいし…」

「べ、別にそんなところ無いが…」

もちろん嘘だ。山田に触ってほしいと夜な夜な妄想しているところはある。しかし、そこは客観的に見れば当然ダメな場所だし、それを言えるはずもない。待っているのは刑事罰だ。

「そう…。市川からはハグしてくれないの？」

「え…まあ、していいならするけど？」

ダメだ、理性の紐が細くなりすぎて、掴もうにも掴めない。

さっきまで神社のしめ縄くらい立派だったはずなのに、今ではシンクに落ちたカップ焼きそばのカスよりも脆い。

「していいなら」だなんて、欲望に操られてるなりにカッコつけたつもりなのかもしれないが、僕がそんなこと決めていいはずがないだろう。

でも、しょうがない。したいんだから。言ってしまったことを取り繕うほどの理性は既に無いのだから。

「ふうん…そう。するんだ。したいんだ。ふふ…ふへふふふへふふふっ」

「へっ、変な笑い方するなよっ」

「さっきの市川とおんなじだよ、ふへっ」

同じなものか、こんなに可愛くて誰をも幸せにしそうな笑顔が。

「でも、触りっこしてからじゃないとハグさせてあげませーん。残念でした」

触りつことハグ、どっちを先にするのがより健全で倫理的であるか、そんなことを考えるのも馬鹿馬鹿しくなるほど間抜けなやり取りだ。

「利用規約かよ。今まで俺の規約なんて読んでなかったくせに。なら…これから作るか」

「やった、市川もやる気になったね。それでは、順番に触って規約を…」

「ん、ちよい待った。ここですか…？ 公衆の面前ですることじゃないだろ…」

「あー、それもそっか。そうだねえ。じゃあ、どうしよっか…」

「ふむ…」

山田は不自然に顔を逸らし、横目でこちらにチラチラと視線を送っている。その視線から逃げないように僕も明後日の方向を向くが、負けじとチラチラ見るたびに、まったく違う方向を向いてる山田と目が合ってしまう。

「…ぼ…俺の部屋…」

気がつけば、各々の家路へと分かれるポイントはどうに過ぎ、既に僕の家屋根がちらりと確認できるような場所まで歩を進めていた。下

手な目配せをしたり、小さな勇気をもって部屋へ誘ってみたりしたが、僕たちの答えはもうだいたい前に出ていたようだ。

「…妥当なチョイスだね」

これが健全で倫理的な友達関係の在り方かどうかは、いま考えても無駄なことだろう。



「お邪魔します…。市川のママもおねえちゃんも、まだお仕事だよね？」

「そうだけど…なんでわかるの？」

「な…なんとなく」

我が家の情報ばかり一方的に山田へ筒抜けになっっている気がしなくもないが、誰もいないことを前提に来てくれたのであれば、ありがたい話だ。これからする遊びを家族に見られたら、僕は義務教育も終えずに勘当されるだろう。

「三度目なのに、ちゃんともてなせてないな」

「んーん。いつも急だから気にしないで」

「紅茶淹れてくるから、先に部屋で待ってて」

「あ…、うん」

ティファールでお湯を沸かし、ティーバッグの紅茶を淹れる。風邪を引いた時に見た夢でこんなシーンがあったような気がするが、その記憶も今となってはあやふやだ。

マグカップと適当な菓子類を盆に載せ、二階の自室へ上がると、既に山田はコートとマフラー、ジャケットを脱いでベッドの上に畳んでいた。

「ごめんね。お邪魔してるのに寛いじゃって」

「客なんだから別にいいけど…。というか、テーブル無いのに紅茶とか間違えたわ…。すまんが、ベッドの頭んとこ置くぞ」

「ありがと」

猫の額ほどのヘッドボードの上にマグカップと菓子類を並べ、僕は勉強机の椅子に腰掛けた。真白なブラウス姿となった山田はベッドの上でちよこんと座っている。

「ねえ、そっちにいたら手が届かないよ」

「…一口だけ飲ませてくれ。山田も、出された茶は熱いうちに口つけるのが礼儀だぞ」

「ぬう……。じゃ、いただきます」

おねえが買ってきたと思われるハーブティーの香りが、昂った心を少し穏やかにしてくれるような気がする。以前これを飲んだ時、その日は日常のルーチンがあまり捗らなかったことを思い出し、鎮静剤のつもりで淹れてみたが、なかなかよさそうだ。

僕は落ち着きを取り戻し、山田の隣に腰を据える。

「で、どういうルールでやるんだ？」

「ルール？ あ、ああ、はいはい。じゃあねえ、相手が嫌がるかもしれないなーってところを触って、大丈夫だったら大丈夫、嫌だったら嫌って言うの」

「それ、いま考えたルールだろ……」

「バレたか。ま、まあ、樽に剣を刺す感じでやろうよ」

「嫌なところに触ったら負けってことか」

「ちがうよ、そのまま続けるの。目的は触っていいところダメなところを知って、完璧な利用規約を作ることなんだから」

「……それ、規約が完成するまでに俺たちの信頼関係が崩壊してそうなんだが」

「だ、大丈夫だよ！ 市川のこと叩いたりしないしっ！」

むしろ叩くくらいの勢いで拒絶された方がわかりやすいんだが、山田はやさしいから手が出ることもなんて無いだろう。エスカレーターして取り返しがつかなくなる前に、僕が自制してゲームをコントロールしなければ。

「じゃ、俺が先攻で行くぞ。肩からな」

一度、恐る恐る触れたことがある肩に、今日はずっと手と手のひらをのせる。まあここなら大丈夫だろうと思っていたが、冬には似つかわしくない湿度を帯びた山田の肌と、ブラジャーの紐の輪郭がブラウス越しにはっきりと伝わってきて、ハーブティーの効果は一瞬のうちに立ち消えてしまった。そして、触れられて大きく反応する山田の瞳孔の動きにつられて、僕の心も大きく跳ねる。

ああ、ヤバイ。この遊びは想像していたやつ何十倍もヤバイぞ……

「……手、中に入れて」

「え、え、なにそのルール？」

「ん……。服越しに触られても本当にダメなのかわからないから……。市川も学ラン脱いでよ」

そう言うと山田はブラウスの第二ボタンを外し、生身の肩への侵入経路を示してくれた。まだ真冬だが、こんな時に限ってヒートテックを着ておらず、そこには水色のブラ本体と豊かな胸の半分ほどが覗いていた。写真で何度も見たはずの山田の下着姿だが、目の前にするとその汚れない白い肌と肉感的迫力に、大量の生唾が間欠泉のように湧く。

僕はいそいそと学ランを脱ぎ、夏でも外すことのないシャツの第一ボタンを解放して生唾の通り道を確保した。

「じゃあ……。新しいルールに従って……」

「ど、どうぞ……。ん、んあ……」

ルールの名の下、震える手を肩に挿し込むと、じんわりと汗を帯びた身体がクネクネと振れた。見た目どおり絹のような乾いた触り心地を想像していたが、実際には手のひらとの間にしっとりとした汗が入り込み、吸い付いて離れない。見上げれば、山田は燃えるように顔を赤らめ、目にはうっすらと涙を浮かべていた。

なんて可愛く美しいのか。殴られても、包丁で刺されてもいいから、このまま今の山田の恥じらった顔を眺めていたい。スマホの待ち受け画面にしたい。

去年の夏に置いてきたはずの殺人衝動が、形を変えてすぐそこまで近づいているのがわかる。この肌に刃物を突き立てて傷つけたいわけではないし、このまま首を締めたいわけでもない。ただ、僕の手で淫靡に歪む山田の表情がたまたまなく愛おしくて、そこに殺人の代償行動を見出しってしまったのだ。

「あつ、ん……。ここは……大丈夫だよ……んん……」

「本当に大丈夫なのか？」

「え……ほ、ほんとだよ……あ、あ、あつっ」

僕は少し悪戯っぽく、鎖骨の下に一文字を引くように親指の爪を軽く這わせる。大丈夫という言葉とは裏腹に、山田の身体は大きく仰け反った。「これ以上いけない」という天の声がどんどん小さく遠ざかっている。

「も、もういいでしょ……？ 次、私の番……」

「あ……うん……」

汗まみれになった肩から名残惜しく手を引き抜き、行儀よく膝の上に置いた。山田は乱れた息を整え、僕の顔へと手を伸ばす。

「唇は……触っていいよね？」

「え？ ああ……別に構わな……んん……」

細い指先が押し付けられ、口を塞ぐ。そのまま円を描くように冬の荒れ気味な唇をなぞる。時折、口角をふにふにと突いたりして、また唇へと戻る。

「へへっ。市川の唇……やわらかいね」

「………んむっ」

「あつ」

僕は釣り餌に誘われた魚のように、その美味しそうな指に喰らいつき、釣り上げられる前に十分に味わってしまおうと舌をぐるりと這わせる。塩気の中に微かにチョコの味が混じっている。昼休みに食べていたアーモンドチョコだろうか。

「ひゃっ……あつ……ダメダメッ!!」

可愛らしい声とともにスポンと指が抜ける。思っている以上に食欲に舐めていたのか、その指は唾液にまみれ、ぬらぬらと光る糸で僕の唇と結ばれていた。

「山田は指がダメか。もう手繋げないな」

「え、う、ダメじゃ……ダメじゃないけど……いきなりされたら……」

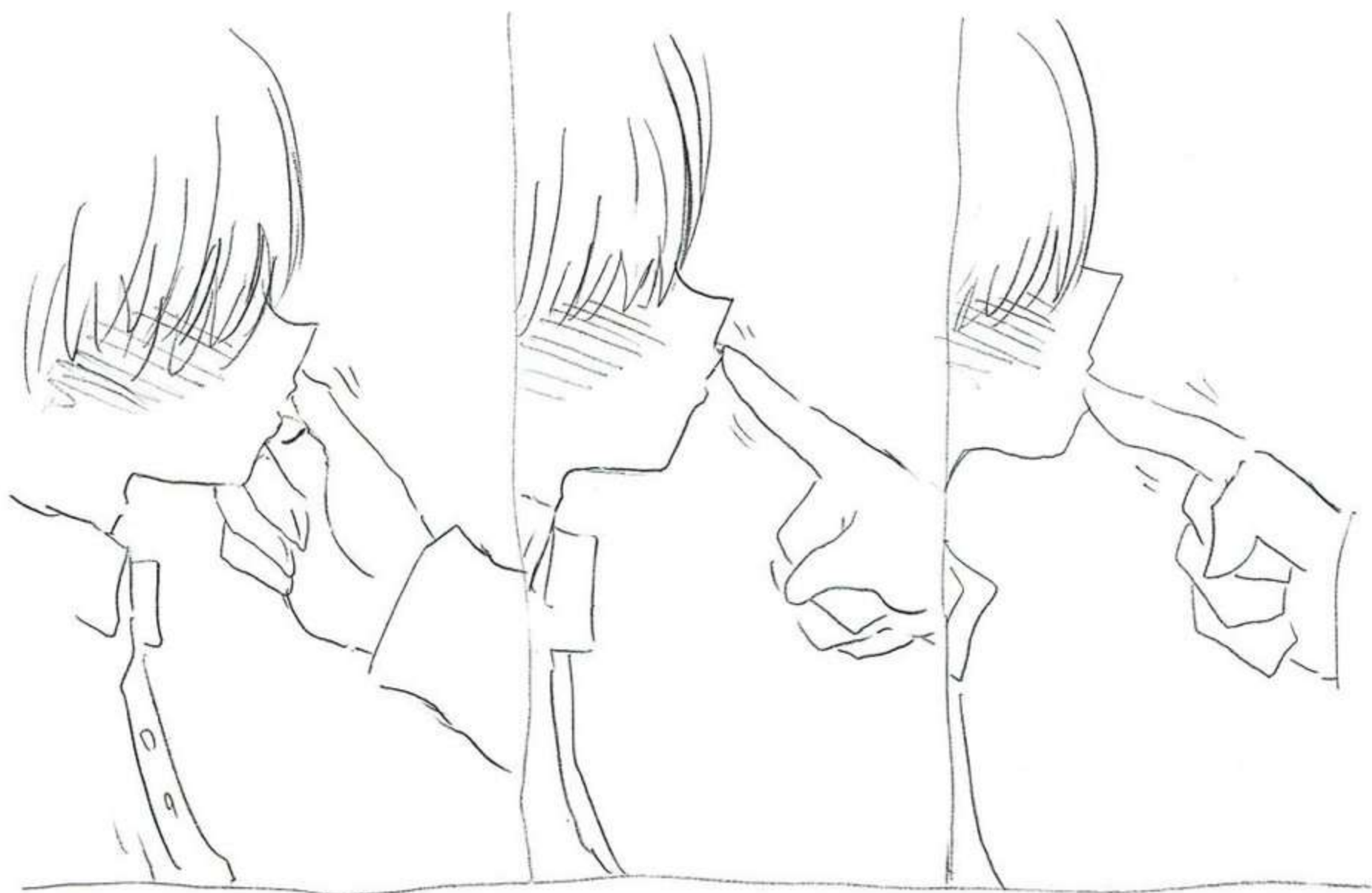
「気持ちの準備が大事だって、よくわかっただろ？」

「うう、じゃあ私の唇も触っていいよ……。お互い触っていいとこだね、覚えとこうね……」

やや怯えた様相で、山田は自ら次の一手を示した。既にルールが崩壊しているように見えるが、そんなこと気にしている状況ではない。僕は気持ちの準備が極めて歪なカタチで整ってしまっている。

「いくぞ」

さっきまで虫のように鎖骨を這わせていた親指を使い、今度は薄い唇をやさしくなぞる。うっすらとリップクリームが残るぷにぷにとした柔らかな表面を指の腹で味わい、口元についた



こし餡を爪でこそぎ取る。急いで押し込んだからか、いつも以上に口の周りが汚れている。

「んっ！」

まだ味わえるこし餡を拭われたことに怒ったのか、仕返しとばかりに僕の親指は山田に食らいつかれた。「まいったか」といった目でこちらを睨みながら、ちゅうちゅうと親指を吸う姿はなんとも滑稽だ。口の中では舌が艶かしく動き、爪、関節の内側、指紋のすべてでその生き物の捕食者としての本能を感じる。喰われる側の温厚な草食動物とて、ここまでされたら凶暴性に火をつけるしかない。

親指には凹になってもらい、手のひらを赤らんだ頬にあて、小さな外耳へと中指を伸ばす。反射的に後退りする山田の背中を左腕で引き留め、困惑と恍惚が混じった顔を更に弄ぶ。

「んんんんんっ…！ いひ…はわ…っ!!」

耳の産毛を撫でるたび、吸い付かれた親指に強く歯が立てられる。我ながらなんて意地悪をしているんだと思うが、今日に限ってこれはいいことだという根拠のない自信がある。イジメの

加害者は、かくも無自覚なものだ。

「んん…はあ…くう…ふう…」

「耳はダメなとこだったっけ？ うろ覚えだから違ったかもしれない」

「た…ためひやない…よ…。たい…ふひ…」

「そうか。じゃあ、覚えたからな」

「ひゃんっ!!」

親指を抜きがてら、中指を軽く耳の穴へと押し込んだ。いや、穴に触れた瞬間に山田が硬直してベッドに倒れ込んでしまったので、正確には押し込めてはいない。

山田は布団に顔を埋め、大きく肩で息をしている。表情を見ることはできないが、触れていた耳は湯気が見えんばかりに赤く熱れ、小さく震えていた。

耳が弱いことはもちろん知ってはいたが、ここまで敏感に反応してくれると、まるで自分が凄腕のテクニシャンになったように思えて気分がいい。ガチガチの童貞だけど。

「市川のいじわる…」

「ダメじゃないって言った」

「だ…ダメじゃないけど…けど…」

それっきり、山田は突っ伏したまま黙り込んでしまった。僕から返す言葉も見つからず、図書室であれば耐えられる長い長い沈黙に、だんだんと穏やかじゃない感情が沸き立ってくる。

慣れないキャラを演じてやらかすぎたんじゃないかという不安もだが、それ以上に僕らが無意識に共有する押しはいけないスイッチに触れてしまった気がして、これからこの部屋に訪れるものは謝罪とか言い訳とか赦しとか、そんな生易しい行動ではないのだと、なんとなくわかってしまったことに心穏やかではなかった。

「い…ちかわさあ…」

張り詰めた空気の中、先にか細い声で口を開いたのは山田だった。少しほっとしたが、あんなことまでしておいて、こういう時に動けない自分が嫌になる。

「も…もうさあ…、触っていいとこで…触って

も…いい…よね…？」

「…理屈として間違っではないいな」

何が理屈だ。山田がこんなにかんばってくれ

てるのに、ちょっとは事実を真正面から見ると力をしろ。ほら、もう身体を起こして潤んだ目でこっちを見てるじゃないか。これから何をするかわかってるなら、責任ある行動を取れ。

「だよね…。じゃあさ…」

「うん」

「順番…どっちだっけ…？」

「わからん…けど、僕から…にしてほしい」

「うん…ありがと…」

瑠璃色に光る瞳が閉じられ、長い睫毛に涙が溜まり、またそれがキラキラと光る。それが紅をさしたような頬につたう前に僕は踏み出す。ぎゅっと布団を掴む手に自分の手を重ね、そのままゆっくりと唇も重ねた。

「ん…ん…ん…っ」

あ、めちゃくちゃ柔らかい。ある程度は予想してたけど、生まれてこの方、こんなに食感がよく美味しいものを口に含んだことがない。味蕾ではなく唇で感じる味なのか、甘味でも酸味でもないものが脳に伝わり、依存性の強い薬にやられたかのように、もっと、もっとと次を求

める。

ちゅぷ… ちゅ… ちゅ… ちゅぷ…

架空の存在だと思っていたいやらしい音が部屋に響く。互いの唇を何度もやさしくついばむ儀式を経て、二枚の舌が絡まるまでそう時間を要することはなかった。今日の給食の味がするかなんて考えを巡らす余裕などなく、性的興奮なのか愛しさなのかわからない猛烈な感情だけで激しく山田を求めているうち、ついぞ僕の思考回路はピタリと動くのをやめてしまった。

じゅ…じゅる… ハア… ちゅ… ちゅ…んぐ… ハア… んっ ちゅ ちゅぷ…る…

「ぶはっ。ちょ、市川、ちょっと待っ…て…」

「…え？ え？」

「めちゃくちゃ…グイグイ来るから… ハア… ちゅ…と待って…」

「あ、あ…ごめ…。興奮しすぎて…つい…」

「こう…それは私もだけどさ…。そんなの言わなくていいから…」

「なんか…すまん」

「もっとロマンチックなの期待してたのに…」

「僕にそんなこと期待されても…。先に誘ったのは山田の方だろ…」

「むう。それはそうだけど…、ガマンできなくなったの市川のせいだからね」

「連帯責任だ」

「ええー。もっとやさしく焦らしてほしかっただけなのに！ なんてあんないじめっ子みたいなことするかなあ…」

「それは…昔を思い出したというか…」

「市川がいじめっ子なわけないじゃん。なんかカッコつけて変だったし」

「…バレてたか？」

「当たり前だよ！ 濁川くんだってあんなことしないよ！」

「別に僕は濁川くんじゃないし…」

「女優さんを侮らないで。絶対に濁川くん意識して失敗してたもん」

「…まあ…影響されてないというのは嘘かもしれない。山田はこんな男が好きなのかなと思ってたし…」

「濁川くんは好きだけど、漫画は漫画だもん。」

市川にはいつも通りでいてほしいな」

「善処する」

「じゃあ、続きしよ。市川からでいいよ」

「まだやるのか。じゃあ、おっぱい」

「：濁川くんはそんなこと言わないし、私はロマンチックなの期待してたって言ったよね？」

「カッコつけて変だって：」

「もう、極端だよ：。ん、まあ：上からなら：いいかな：」

「さっきは直接じゃないとわからないって：」

「やっぱ、見られるの恥ずかしいし：」

「まあそっか：。ん：、あの：触りっこなんだから、見なければいいんじゃないか：？」

「：：：：じゃ：チュー」

「：ん？」

「：チューしながらだったら、見なくても触れるよね？」

「そ、それは妙案だな：ん：」

「んむ：ちよつと待つへね：」

「んん：：」

ちゅぷ：はふ：ちゅう：ふう：：カチツ

んむ：ちゅ：スツ：スル：ちゅぷ：：パサ：

「あ、もう外ひた？」

「うん：。さ、触っへいいよ：やさひくね」

「ホック：外ひてみたはった」

「：らんか今日のいひかわ、貪欲。またほんろね：」

「単なる興味：あ、すご：」

「んんあっ！ やさしくって：ひゃうっ！」

「うわ：あ、ありきたりな：感想だけど：信じられないくらい柔らかい：。ヤバイ、ずっと触っていたい、手が離れない、指が止まらない」

「は、恥ずかしいから言わないでよ：んんっ、

チューしながらって約束だよ：」

「ごめ：。でも、なんか言いたくてたまらなくて、嬉しくて、もつとしたくて：」

「あ：あつ：。乳首ダメっ。あふ：いつもと：ちがう：」

「いつも：と？」

「あつ：や：い、市川だって：いつもしてるでしょっ!？」

「：なん：そりゃ：男だからしてる：：けど、山田もしてるとは：」

「私はしてるって言ってな：ん：」

「う：ズルいぞ。僕だけ辱めを受けるなんて」

「それ：夢中でおっぱい揉んでる人のセリフ：？ んんああ：」

「しよ、しょうがないだろ：見れないんだから。どんな輪郭なのか、乳首が今どんな形しているのか、手で知りたいんだよ、こんな風に：」

「ひゃん！ あっああっんふっ、んぐうう：い、

イツ：」

「い：いつもと違うか？ なんか急に固くなったんだけど：」

「う：：いつもじゃない：けど、今：なんか飛んじやいそうに：」

「指で挟ん：この強さ？」

「あつダメっ!! うあ、ダメだけど、どうしよ

っ、そのままっ、そのまま！ あっあつ、イツ、もつとヤバイの来ちゃう、どうし、んっ！」

「え、えっ、どんどん固くなってる：。山田：

今の顔、めちゃくちゃ可愛いぞ：」

「えっ!?! いま!? はうっ、あ、あっあつ、市

川っ、チューして！ チューしてっ!! 声出ちゃうから!! もうイツちゃうからチューして!!

はん：：む：んんんんんんんんっ!!」

ちゅう：ビクン！ はふ：んむ：ビクン！

「んぐう：んん：。ひう：」

「すご：。こんな風になるんだな：」

「ふうー：ふうー：。いち：かわ：：」

目え：瞑ってて：」

「え：」

ドンツ！ バサツ!!

「私には貝になりたい」

「お…だ、大丈夫か…?」

「…恥ずかしすぎる。イキそうな顔で初めて可愛いって言われた。意地でも可愛いって言うてくれなかったのにイキそうな顔で言われた。なんでこのタイミングで言うの!? もう知らない!!」

「……ごめ…。でも…」

「…でも?」

「…山田のこと、めちゃくちゃ可愛いって、ずっと思ってたし、いま布団被って拗ねてるのも、胸をギュッと締め付けられるくらい可愛い…」

「……モデルやってる私は?」

「もちろん可愛い。でも、実物の方が何百倍も可愛い。毎晩シエル見ても全然物足りない」

「ほ…褒めてるつもり? お仕事してる時はいつもの何倍も気合い入れてるんだよ? それでも今の方が可愛いって言うの?」

「うん…、そうだな。こんなに可愛い子を独り占めにして、天罰が降らないか不安になるくらいだ」

「……市川、こっち来て。お布団の中」

「…いいのか?」

「いいから、早く来て」

「じゃ、じゃあ…邪魔するぞ。前、隠したか…」

うおっ!

ガバツ ガシツ!! ぎゅうううううう…

「天誅ーっ!! コラ、市川っ!! そんなに可愛いんだったら、普通に可愛がってよっ!! 意地悪で愛情表現って小学生じゃないんだからっ!!」

「むおっ…!! 山田っ、苦しいって! 窒息するからっ!!」

「大好きなおっぱいに埋もれて幸せでしょ!」

「しっ、しあわせだけどっ、ぎゅむっ。ごめんっ、悪かったからっ、離してくれっ!!」

「謝るだけじゃ許さないっ!! 仕返しするからね!? いいっ!」

「いいからっ!」

「絶対だよ!! じゃ、解放っ」

「ぶはっ、はあ…はあ…死ぬかと思った…あ。ごめん、見えた…」

「今はお布団で真っ暗だから何も見えないよ」

「い、いや…普通に光漏れてるし、乳首めっちゃくちゃ勃ってるの見えるし…」

「もうっ! なんにも見えないのっ!!」

「な…、なら…、そういうことにするわ…」

「次、私の番だからね! 市川のおちんちん触

りたい!

「…汚いから」

「触らせて! 見えないから恥ずかしくしないでしょ!」

「……後でよく手洗えよ」

カチャ…カチャ…

「私に脱がさして」

「お、わ…おい! あ、あっ、あっ」

「……へえ…、大きくなるのは知ってたけど、いつもこんなにヌルヌルしてるの?」

「…そんなわけあるか。半分…イキかけたただだ…」

「おっぱい触ってる時?」

「………最初にキスした時」

「え………かわいい」

「い、今…そんなこと言うなよ。恥ずかしいだろ…」

「仕返しだよ。あ、暗くて見えないけど、市川のおちんちん大きいんだね。もう触っちゃったし、これからいつでも触っていいよね?」

「そんなわけ…、んんっ…あまり…上下に動かすな…。もう…寸前までキてる…から…」

「何がキてるの? あ、そうだ。目的を見失う

とこだったよ。ここまで触れるとこ増えたら、人前で手を繋ぐなんて全然ヘーキだよね？」

「い、いや、やっぱそれとこれ…とは…んっ」

「私ね、映画のお仕事の前にレッスンがあつて、エチュードもやったんだ」

「そ、即興劇つてやつ…か」

「うん。今から私がお布団の中を学校にしてあげるから、手繋げるか試そ」

「えっ…ん…握つてるとこが違うだろ…っ」

「市川あ、おはよお。今日もお寒いねえ。あ、でも、市川のおちんちんは熱いからあつたまるなあ」

「ひぐっ！ん…んあ…」

唐突に始まった即興劇をトリガーに思考回路が再び動き出す。とてもレッスンを受けたとは思えない棒読みの演技だったが、その拙さゆえに日常のどこか幼さを残す山田と学校との風景を想起してしまい、僕は尋常ならざる羞恥心に襲われることとなった。

僕は、教室へ急ぐ生徒たちが行き交う学校内で、今にも射精しそうな陰茎を晒しているのだ。

「原さん、おはよ。今ね、市川がおちんちんイキそうだから撫でてあげてるんだよ」

「んんんっ…!!」

ああ、原さん、こんな粗末なものを朝から見せつけて本当にごめん。神崎より僕らの方が遙かに変態だと知ってショックだろう。どうか見捨てないでくれ。

怒張の扱いに慣れてきたのか、山田の手つきがより艶かしくなる。登り詰めてくる射精感、そして漏れる喘ぎを押さえるため、目の前でふるふると震える乳首を口に含み、硬くなったそれを舌で激しく舐めることへ意識を逸らす。

「あつ、あつ!! はあん!! ち、ちい…朝練おつかれ…。私もイツ市川に…お…おっぱいあげて…大変なんだ…」

「いい…、すごく…んっ、かわいい…」

「もおお…萌子も…にゃあもおは…んん。ね…スゴいよね、市川の…おちんちん。み…みんなに見られてても…こんなに硬い…んだよ」

分泌液を纏った細い指が何度も亀頭と裏筋を往復する。生物として円滑な交尾を行なうため、陰茎がますます硬くなっていくのは触らずともわかった。じんじんと痛いほどに反り上がっている。

「あう…あだちくん…今日は…んっ、早いね」

「足立の…名前なんか出すなよ…くっ」

「んあ…もつと囁ん…。い、市川もね、チューだけで半分イツちゃうくらい…早いんだよ」

「山田は…もうイツただろ」

「ヤダ、言わないで…っ。あ、南条先輩、おは…ようございます…」

「なっ…」

ナンパイの名前を耳に入れた途端、苛立ちと山田への独占欲がブワツと溢れ出す。このエチュードのナンパイが何を企んでるかなんてどうでもいい。二度と僕らの前に現れるなという強い意思是、乳房を弄んでいた手をスカートの中へと導き、温室のように蒸れ、夥しい水気を帯びる秘部を指先が泳いだ。

「あ、あああっっ!! あの…っ、お誘いは嬉しいんですけど…んはあうっ! ヤダヤダまたイツちゃうっ!! 私っ、市川…くんと…こう…なんでっ!!」

「先輩!! 山田のイク顔は俺以外に見せたくないんで…どっか行ってくれませんかっ!!」

「アッ! んふ!! 私も市川の…イクとこ見た

い…んんんっ!!」

体液でびしょびしょになったお互いの手のストロークが一層に激しくなる。既に愛撫というより、早く絶頂を迎えたくて相手を挑発しているかのような粗暴さだが、倒錯した僕には痛みすら未体験の快楽としか感じられなかった。

山田もまた、時折奥歯を噛み締めるような顔をしては、僕の手を太腿で強く挟み、前後に激しく腰を揺らす。

「はうっ、あっあっ、ヤダヤダヤダ、私だけイクのヤダ! 市川っ、市川もいっしょじゃなきゃヤダ! ぐうーうーうーっ!!」

「山田っ! 山田っ!! もうイクけど! 汚れるからて…手で…受け止めてくれ!!」

「このまま出してっ!! 市川のかけてっ!!」

「そんな…っ、あっ、いつ、ぐあーうーっ!!」

「や、やつ、アツっ、ん、んんんーうーっ!!」

山田の手に導かれ、布団の中でしこたま射精をする。キスの時に半分出したと思っていたが、その量は精通以来の記録だった。

何度放たれたかわからない精液は、半分以上が山田の元に着弾し、腹や太腿だけでなく、紺

色のスカートに濁った白い筋を残していた。

「はあ…はあ…、ご…ごめ…。服…あの…」

「ん…はう…んん…」

「僕の…ジャージ貸す…から、洗濯…」

「ん…市川の…だから…洗いたくない…」

「ふ、不衛生だぞ…。それに…そんなの履いてたら…心配されるだろ…」

「ん…そっか…。そだね…」

「まあ…僕のジャージ着て帰るのも…嫌だろうけど…」

「え、ヤじゃないよ…。上も…貸して。また…市川になりたいし…」

「おかしなコト言うなよ…」

「市川のならば…なんでもほしい…」

「僕に…やれるものなんて…」

「…あの…ち…お…おちん…ちんもほしい…」

「…も、もう…母さん帰ってくるから…」

「土日、撮影なの…。お仕事だいすきなのに…ヤになってきちゃった…」

「や…げ、月曜…さ、昼休みにさ…」

「…うん」

「び、備品…倉庫で…。あの…土日のうちに…つ、付け方とか…ちゃんと練習するから…」

「うん……休み時間、短いから手間取ってられ

ないね…。あそこ…鍵あるもんね…」

「…給食終わったら…手繋いで…エスコート…するから」

「嬉しい…約束だよ。お仕事…がんばるね」

◇ ◇ ◇

山田が職業モデルとして精を出す裏で、僕はドラッグストアの店員に怪訝な顔をされながら何種類かのコンドームを仕入れ、自室でシミュレーションを重ねる。空っぽだった週末の予定は、存外に高かった避妊具との格闘に費やして過ぎていった。

そして月曜。あれだけ何度もキスを交わしたというのに、いざ約束の時間が近くなると、まともに目を合わすことすら恥ずかしくて、朝の挨拶もできないまま給食の時間となった。

もしかしたら、今日はこのまま有耶無耶になるのかな、その方がお互いのためかな、なんて思い始めた時、おかわりもせずに食器を片付けに行った山田が耳元で「行こ」と囁いた。

僕は残る給食を大慌てでかき込み、廊下で待たせてくれた山田のもとへ急いだ。緊張で汗が滴る手が滑らないよう互いの指を絡ませ、僕らは無言でいつもと違う景色の階段を下りる。

記憶のとおり、備品倉庫の扉は鍵が備わっていた。しかし、つまみ部分が空回りして施錠はできなかった。今まで僕らが自由に出入りできていた理由がよくわかったが、場所をあらためるほどの理由ではなかった。

「もう待てない。しよ…」

「うん…」

『倉庫内にいる限り、その扉は決して外から開くことはない』という根拠の無い条件を記して、僕らの利用規約は完成したからだ。

《了》

市川山田、同棲中（特別編・僕と山田のヤバイやつ）

じよに

皆がよく知る山田像、というものがあるとする。

それは社会人としての山田であり、娘としての山田であり、芸能人としての山田だろう。

中学からの夢を諦めなかった山田は、今ではモデル兼女優の卵として、日々を多忙に過ごしている。

その夢の傍らに寄り添えたことは、僕にとって何よりの僥倖だったと言えるだろう。

対して、僕しか知らない山田というのも、この世には確かに存在する。

かつて友人小林との些細な行き違いに涙し、傷ついていた山田。

僕の話にうんうんと頷き、僕の目を真っ直ぐに見つめようとしていた山田。

いつしかお菓子を頬張ることを控え、図書室での勉強に精を出し始めた山田。

そのどれもが懐かしく、また青臭くて恥ずかしくなるような、僕と山田の青春の1ページで

ある。

そして今。

目の前で淫らなベビードール姿を披露して、僕を誘惑する山田もその一つだった。

あの頃の僕にこのことを教えたら、どんな反応を見せるだろう。

かつて憧れていたあの娘が、今では僕にしか見せない姿と顔で、いやらしく腰を揺らしている。

夢だと、頬をつねるだろうか。山田はそんなことしないと、怒るだろうか。

ただの妄想と鼻で笑って、そのクセ悶々としながら眠りにつくだろうか。

しかしこれは、紛れもない事実である。目の前にいる山田は、夢でも妄想でもバーチャルでもない、現実の存在なのだ。

その山田は董色の薄いベビードールをその身に纏い、僕へ向かって扇情的なポーズを繰り返していた。

向こうが透けるほど繊細な生地は、山田の白磁のような肌によく映えている。

ショーツはベビードールの静かな色合いとは対称的に、燃え上がるような派手な赤色である。

ブラはつけておらず、胸の突端が胸部の布を押し上げ、そこにだけ僅かな空間を作っている。

「ど、どうかな……これ、似合う？」

山田がポーズを取るのを止め、おずおずと僕に迫りながら尋ねてきた。

「お、おう……似合ってる……すごい、エロい……」

僕はその淫靡さに目を背けることすら出来ず、荒い息を吐くことしか出来なかった。

「良かった！ちょっと冒険しすぎたかなって思

ったから……」

山田は照れながら、僕の座るベッドの隣へ腰を落ち着けた。

流れる髪も、濡れた大きな瞳も、上気する頬の赤みも、全てが卑猥で僕を誘っているかのように見える。

そんな姿で優しく微笑まれて、何も感じない男なんているはずがない。

しばし目のやり場に困っていると、山田が僕の一点に視線を向けていることに気づいた。

「市川、もうおっきくなってる……」

山田は目を丸くしながら、僕の股間に張ったテントを注視していた。

山田のベビードールと同じように、こちらも布一枚で隔てるには少々元気が過ぎたようだ。慌てて股間を隠す僕に、山田はアハハと笑ってみせた。



「今さら隠しても同じなのに」

「そうは言っても、見られたらやっぱり恥ずかしいんだよ……」

僕も山田とほぼ同じく、パンツしか穿いていない状態である。

その無防備さは言うに及ばず、股間が強調される恥ずかしさには未だに慣れなかった。

もちろんそういうことをするために準備してはいたのだが、今日はそれだけでは終わらない。今日という日のこの行為は、僕と山田にとって、特別な意味を含んでいた。

「へへ……ねえ、市川。今日は市川の好きなこと、触ってもいいよ？」

山田はベビードールの裾をつまむと、ひらひら揺らしながらそんなことを言った。

いつもはどちらが主導権を握るか探り合いから入るのに、珍しいこともあるものだ。

白い太ももの艶かしさが目にも眩く、僕はごくりと喉を鳴らす。

けれど、まるでそんなものを意識していないかのように、僕はまず山田の頭を優しく撫でる。

「ん……ふふふ。市川いつも頭よしよししてくれるから好き……」

山田はベッドに手をついて、僕へ頭を擦りつけるように首を傾けた。

僕はその豊かな黒髪感触を楽しみつつ、反対の手で山田の腿へ指を這わす。

蟻がたかるような、羽毛でくすぐるような、微かな手つきでそこを刺激する。

すると山田は眉をしかめ、それだけで少し体を震わせた。

「その触り方、すごいえっちだよ……」

何も特別なことはしていないのに、山田は身をよじって僕の触れ方を受け入れる。

俗に言うフェザータッチという触り方を、山田は気に入っているようだった。

「これでも試行錯誤してるんだよ……ちゃんと、気持ちよくしてやりたいし……」

それは僕の、偽りない正直な気持ちである。

AVを見て学んだり、ネットのハウトゥを調べてみたり、僕だってこれに関してはけっこう

努力しているのだ。

「市川のそういうとこ、私は好きだなあ」

「自分だって同じようなもんだろ」

「ウフフ……いつもありがとね、市川」

からかいあうような言葉の裏で、山田が内股をモジモジさせ始めていることに、僕は気づいていた。

腿を何度も往復してから、今度はベビードールに手を潜らせて山田の腹部を触る。

ヘソを中心にして触れると、山田の肌のきめ細やかさが、これでもかと伝わってきた。

脇腹や胸の下、みぞおちまでを丹念に擦り、磨くように両手を動かすと、山田は逃げるように軽く尻を浮かせ始める。

「どこ触っても感じるよな、山田って」

「やあ、ばかあ……変なこと言わないでよ……」

その痴態があまりに愛らしく、僕は山田をやるわりとベッドへ押し倒していた。

「いちか……」

僕の名前を呼ぼうとした唇を、上から覆い被さって半ば強引に塞ぐ。

ぬるりと絡まりあう舌は、唾液に濡れて湿っぽい水の音を響かせた。

山田もその行為に興奮したのか、吐息は荒く、心臓の鼓動まで聞こえて来そうなほどである。

僕から仕掛けたのに僕の脳髓まで溶けていくようで、どんな感覚よりも快楽が優先されていく。

山田も僕の頭の後ろに両手を回して、どう足掻いても逃げられないよう固定していた。

かわいい。鼻から抜ける呼吸までもが、そう思える。

無我夢中でその唇を貪っていた僕は、ふと閉じていた目を開いた。

山田はキスをし、舌を絡ませている間も、ずっと僕のことを見つめていた。

急なその事実には恥ずかしさを覚え、僕は反射的に山田から体を離す。

山田の手がほどかれ、僕は自由の身となった。

「見るんじゃないよ……」

「あっ、もー……」

いいところだったのに、とでも言いたげな顔で、山田が手首で口を拭っていた。

「自分からしてきて逃げるの、ナシでしょ？」

好物を取り上げられた子供のように、山田がブーブーと文句を言う。

「キスの時くらい目をつむってくれよ……」

「やあだ。市川のかわいいところ、全部見たいの」

山田は言いながら上半身を起こして、今度は僕の太ももに指を這わせた。

「市川ギブしちゃったから、今度は攻守交代ね！」

「ま、待った……今触られたらヤバイから……！」

「へえ、そんなにヤバイの？」

山田は意地悪くニヤニヤ笑い、下着越しの僕の陰茎を指でトントンと刺激した。

たったそれだけのことで、僕の先端は容易く脳髓へ快楽信号を送ってしまう。

「あふっ……」

「市川、先っほいいじられるの弱いよね？」

すでにパンパンに張り詰めた僕のそれを、山田は巧みにイジリ倒していく。

先端を指先で撫で、輪を作ってカリ首を緩く締め上げつつ、陰囊を裏から優しくマッサージする。

その手際の良さに、僕は山田の肩を掴んで必死に抗おうとしていた。

妙な矜持ではあるが、男として山田より先にイキたくはなかったのだ。

そんな僕の反応を確かめるように、山田は僕の下着を下ろして、直に陰部を刺激し始めた。

「うっ、あっ……！」

「市川さあ、先走りでもぬるぬるにしてしごと、すぐにイッちゃうよねえ？」

山田は今にもそうしてやろうと、僕のそれを緩く緩く撫であげる。

先走りの液は絶え間なく零れ、たわんだ皮でせき止められて溜まっているのが見える。

今にも暴発しそうなほど、陰茎がひくひくと

痙攣する。

けれど山田は、僕が我慢の限界を迎えるギリギリで手を離して、刺激を与えるのを止めてしまった。

「あっ……」

「イキたかった？でも今日は市川の全部、私に飲ませてくれるって約束でしょ？」

そしておもむろにベビードールを脱ぐと、僕の顔をその豊満な胸の間へと埋めた。

何度触れても感觸の変わらない山田の胸に、僕はそれまでの快感も忘れて感動さえしてしまっただ。

初めて触れた時と変わらない弾力、感度、そしてサイズ。

それを贅沢にも今、顔全体で味わってしまった。

これを至福と言わずして、何をそう呼ぶと言うのだろうか。

その柔らかさに僕がいつそう股間を固くしていると、山田が僕の耳に添えるように、小さな声で呟いた。

「あのね、そのままでもいいからちよっと聞いて

ほしいの」

そう言うと山田は僕の背中に手を回し、ぎゅっと強く抱きしめる。

山田の胸が、僕の顔の凹凸にフィットするように、むにゆりと変形した。

「私これまで自分のこと、ダメだなあって思うことけっこうあつてさ……」

むにゆむにゆ。

「ワガママだし、嫉妬深いし、おしとやかじゃないし、いっぱいダメなところ浮かんじやうんだけど……」

むにゆん、むにゆん。

「でも、私ね……市川としてる時が、一番ダメな私になっちゃうの……」

「とろとろで、頭おかしくなって、恥ずかしいのにもっともっとして欲しくなっちゃうんだ……」

……バギンツ!!

これは僕の股間のもう一人の僕が、臨戦態勢を整えた擬音である。

山田の正直すぎる告解が僕の脳に喝を入れ、性感をこれでもかと殴りつけてくる。

背筋にぞわりとしたものが走り、たまらず僕は、山田の胸の先端にむしゃぶりついていた。

「や、やだ市川……おっぱいいじっちゃダメッ……弱いから……!!」

「こんな恰好で誘惑しといて、今さらダメなはずないだろ？」

柔く乳首を噛むと、山田は甘い吐息を漏らして背筋をのけぞらせる。

その官能的な仕草に、僕はさらに感激して何度も何度も同じことを繰り返してしまう。

山田は泣きそうな声を漏らし、僕はその声にさらに興奮して山田の敏感な部分を弄ぶ。

次第に山田の腰が震え、赤い下着に濃い色の染みが浮かんでいることに、僕は気づいてしまった。

「あ……はあ……あーっ……」

僕は舌の回らなくなってきた山田を、ベッドへ優しく横にした。

先にキスをしたときは違い、寝かせた山田の足の間に、顔を収めるような態勢を取る。

山田は内股になって濡れた下着を隠そうとするが、時すでに遅し。

僕は山田の腰を、中指でつつくようにそつつついて撫でてやった。

「ひゃんっ！」

山田が、それに応じてビクリと腰を跳ねさせる。

そのタイミングを見計らって、僕は山田の下半身から、赤い下着を綺麗に抜き取って見せた。

「やあ……見ないでえ……」

すっかり弱々しくなった山田は、この期に及んでまだ足を閉じようともがいている。

けれど、力のこもらない足など、僕の非力でも簡単に開くことが出来る。

ぬらりと濡れた山田の中心は、それまでの行動で山田がきちんと感じていたことを示してい

た。

驚いたことに、あまり濃くない陰毛まで、山田の分泌液でしっとり湿っている。

これまでも感度はいい方だったが、今日はいつにも増して極まっているようだ。

嫌々をする山田に見ないフリを決め込み、僕はその卑猥な襲の入口へ、味わうように口づけをした。

「あああああっ!! やだっ、それすぐイッちゃ……うーっ……!!」

まだ陰唇しか舐めていないのに、山田は軽く達してしまった。

それでも僕は攻める手を緩めず、わざと音を立てて山田の秘部を舐める。

ぴちゃ、ぴちゃという、犬が水を飲むような音だけが部屋に響いた。

それだけ山田の陰部の湿り気が、尋常でないということである。

山田が感じているという、ただそれだけのことが、僕の興奮のボルテージまでも高めていく。

「んんっ……んうううっ……あああっ!!」

声を上げて快楽に溺れる山田は、どんなAV女優より淫らで綺麗だった。

そんな山田を、もっと感じさせたい。もっと、もっと。丹念に、大胆に、執拗に。

それだけを念頭において、僕は山田を念入りに味見し続ける。

山田の味はしょっぱくて濃厚で、何だか秘密めいた味のような気がした。

世界で、僕だけしか知らない味。山田の体から、とめどなく流れる液体の味。

半透明だったその液体は、舐め続けているうちに白いどろりとした粘液へと変化していった。

それは専門用語で言うところの、「頸管粘液」という液体である。

精子を子宮へ円滑に運ぶために分泌される液で、通常の愛液とは違うものなのだそうだ。

なぜそんなことを知っているかというと、山田をきちんといかせたいがために調べたからである。

それが分泌されるということは、山田の体が僕の舌に、本気で感じているということになる。

その事実には、僕の背がまたしてもぞわりと粟立ち、さらに手数を増やしてしまう。

山田の中に舌を入れ、陰核を優しく刺激し、液体を咀嚼するように嚥下する。

当の本人はその連続に耐えきれず、羞恥と快楽に悶えて体を小刻みに痙攣させている。

「……あッ……うう……」

もはや言葉さえ出ない領域にまで、体が昂ぶってしまっているのが分かる。

もう何度達したか、舐めている僕にも分からない。

たっぷり時間をかけて愛撫した分、山田のそこは限界まで濡れそぼち、物欲しそうにひくひくと動いている。

僕は顔を上げると、山田に寄り添うようになり、そっと耳打ちした。

「山田……」

「ふぁ……?」

「もう、入れていいか?」

「あっ……うんっ!」

山田はイキ果てていた先ほどまでと打って変わって、途端に元気な声を上げた。

僕は少し緊張しながら、股を大きく広げた山

田の前に座る。

極限まで濡れたそこへ自分のものをあてがうと、愛液を潤滑油にするため、そこで先端を下させた。

「……いいんだな、山田。本当にやるぞ?」

「いいよ……今さら後悔なんてしないから……」

その言葉に背中を押された僕は、腹に力をこめて、山田の真ん中へ自分のものを突き入れた。

「ああっ!!」

「ううっ……!!」

そのキツイ締めつけに、僕はすぐさま射精しそうになるのを何とかこらえた。

あまりにも無防備に、僕のそれと山田のそこが触れ合い、擦れあってゆく。

山田の粘膜と僕の粘膜を隔てるゴムの遮りは、存在していない。

今日は僕と山田の二人で決めた、生本番の解禁日だったからだ。

婚前交渉は何度もしているが、避妊せずにしたことはこれまでにない。

どれだけムラムラしていようと、酒が入っていようと、僕から求める時は必ずゴムを着けていた。

逆に山田がムラムラに襲われた時も、ゆっくりと論じてゴムを着けてからにするよう必ず促している。

たとえ押し倒されようと、山田は脇腹や耳を愛撫するとすぐにへたって力が入らなくなる。

その隙を見て生を回避するのは、理性さえ働けばそう難しい課題ではなかった。

それだけのことをするのは、山田が心の底から大事だったからで。

安易に子供を作って、山田の夢を潰えさせたくないと思っていたからだ。

そしてその我慢した分だけ、今のお互いの性感度は過度に鋭敏になっている。

山田の内側の襲の凹凸まで、僕のものにハッキリと感ずるほどだ。

山田も僕が腰を突き動かすたびに、獣のような声を上げている。

「あっあっあっ……今までより全然気持ちいい……声、我慢できないいっ……!!」

「我慢、するなよっ……俺も、山田に全部出すから……!!」

「ふあああっ!? あああああ!!」

僕は山田にのしかかりながら、舌の届く範囲の肌を、余すところなく舐め尽くす。

そうしながら奥の上側を小突くように擦ると、ぷしゅつと音を立てて愛液が吹き出した。

山田の液でベッドのシーツが濡れ、二人の結合部もびしょびしょである。

それでも僕が容赦なく動くと、山田はなおもそこを締めつけ、余裕のない声で訴える。

「やつ……またくる……すごいくる……気持ちいいの全然終わんない……!!」

「あつ、イク!!イクイクイク!! ああああああああ……!!」

シーツを強く握って、山田は狂おしいほどによがりながら達してしまった。

その瞬間、山田の中の締めつけもひととき強くなり、僕はたまたらず山田の中へザーメンを迸らせる。

僕と山田を隔てるものは何もなく、腰の抜けそうな快感と共に、射精は続いた。

山田はその間、僕の腰に足を絡めてずっと離さなかった。

僕も山田を抱きしめ、初めての種付けの余韻に浸った。

山田は荒い息を吐き、全身をまだ震わせている。

目はどこか遠くへ向けられており、僕のこともちゃんと見えているかどうか。

こんな状態になるまで山田と交尾をしたという事実が、恥ずかしくもあり誇らしくもあった。

やがて小刻みな痙攣が収まると、山田はようやく落ち着きを取り戻した。

「いち、かわあ……すごかつ、た……」

胡乱な瞳のまま、山田は僕へ向かって懸命に手を伸ばす。

その手を掴むと、山田は汗と熱のままに、僕へ慈愛の微笑みを見せた。

「へへ……気持ちよかつたね……」

その姿にいじらしさを感じてしまい、僕の胸は無性にときめいてしまう。

まだ終わらせない、終わらせたくないという感情が、尽きずに湧いてくる。

いつもならインターバルを取って休ませるの

に、今日は滾った性欲がそれを許してくれない。山田の中で萎えかけていたものが、みるみるうちに硬度を取り戻していく。

「えっ……」

山田もそれを感じたのか、驚いた顔で僕を見つめ返す。

「ちょ、ちょっと待って市川……まだ気持ちいいの引いてなくて……」

答える代わりに、僕は再び山田の腰を抱いて、ピストン運動を再開する。

「あつ、ウソツ……待って、待って待って……やあああっ!!」

山田の嬌声が、またしても聞こえてき始めた。

「いちかわのちんちんすごい……あつあつあつ!!」

「も、だめ、すぎ、あいしてるの、キュンキュンとまんない!!」

「うあ、またイク、イカされる、イクイクイク

イクツ……!!」

「なんでまた固くしてるのお……市川のスケベえ……」

「だめ、こわれる、おまんこだめ、はずかしいの、あ、やだやだ、やああ……あああああっ!!」

「でちゃう、おしっこでちゃう、それ以上しないで……うあ、もれちゃう、やだ、やだあ……!!」

「うう……だめえ、おなかぐちゃぐちゃになるう……!!」

「いちかわにおなかいじめられてイクのすき……もつとしてえ……」

「あ……あ……も、わかんやい……いちかわすき……すきなのお……」

もはや何回こなしただか、何回イツて何回イカせたかも分からないほど、僕たちはまぐわった。山田の白い液と僕の白い液が混ざり合い、白濁したものが山田の陰部からどろりと溢れている。

名残惜しさを堪えて一物を抜くと、栓が抜けたかのように淫らな液はシートを汚した。

僕は力尽きたかのように、山田の横にどさりと倒れた。

全身がへトへトなのに、この満足感はなんだろう。

山田もイキっぱなしの虚ろな瞳で、天井を見つめていた。

僕のモノも、一週間は勃ちそうにないほど萎えきっている。

疲れて眠たくなる気持ちを抑え、僕は傍らに用意していたティッシュを大量に手に取った。

そして山田のぐちゃぐちゃに汚れた股間付近を、優しく拭いてやる。

「あ、んっ……もお、市川のえっち……」

「そんなんじゃないって。汚れたまま寝るつもりか？」

「フフ……分かってるよ。優しいんだから、市川は……」

山田は山田で、別に用意していたハンドタオルを手に取り、起き上がって僕の汗にまみれた額を拭ってくれた。

「お疲れ様……どうだった……?」

「……すごかったな。生の、セックス」

「ホント。途中から市川、人が変わったみたいになっちゃったね」

「ごめんって……」

「なんで謝るの?私、全然イヤじゃなかったよ?」

山田の無邪気な笑顔に、僕はそれだけで全てが許されるような気持ちになってしまった。

「はあ……でもさすがにもう立てない……足腰ガクガクだよ……」

山田が仰向けにベッドへ倒れ、大袈裟に両手を上げて降参のポーズを見せて。

バフンとワンバウンドして、山田の体はベッドへと沈み込む。

「おいおい、シートだけでも取り替えておかないと汚いぞ?」

「それもそうだね……あつ、そういえば今何時?」

「えっと……0時回ってるな」

僕はベッド横の机に置いていたスマホを見て応えた。

ずいぶんと長い間、山田とまぐわい続けていたような気がする。

山田はにんまりと笑うと、顔だけを僕の方へ向けて言った。

「もう少ししたら私も、市川杏奈だね？」

「お、おう……そうだな」

僕はその事実には急な照れを隠せず、山田から顔を背けてしまう。

そう。この日は山田が山田杏奈という名前を名乗る、最後の日。

今日僕たちは、役所へ婚姻届を提出しに行く予定なのである。

長い交際と二年の同棲生活を経て、プロポーズしたのは僕の方からだった。

周囲からはあまりに気が長すぎると言われ、おねえからは早く結婚しろとせっつかれてもいた。

だからという訳ではないが、生活も安定してきた昨今、ようやく僕は山田へ求婚する勇気を得たのだった。

告白する時とはまた違う緊張に溢れていたものの、山田は僕からのプロポーズを喜んで受け入れてくれた。

それがちょうど、一週間前である。

関係各所への挨拶回りやその他諸々の準備に

追われ、明日からは新たに結婚式の準備が待っている。

その中休みの一日を、生セックスの解禁日にしようと提案してきたのは山田からだった。

『こんな忙しい時だけど、市川との初めては大事にしたいの』

『結婚してからじゃ、二人とも生活に慣れるまで時間かかっちゃうでしょ？』

結婚後がいいんじゃないかという僕に、山田はそんなことを言って説き伏せた。

ご丁寧にも僕にナイショで新品の下着やベビードールを用意し、最初から準備は万端だったということだ。

幸いなことに、今日は婚姻届の提出のために有給を取っている。

夜が明けるまでなら、時間はいくらでもあるという山田らしい配慮だった。

山田はゆっくりとお腹をさすりながら、噛みしめるように言う。

「ちゃんと赤ちゃん、出来てるかな……？」

「一回じゃさすがに……それに今日は安全日なんだろ？」

「へへ……さて、どうでしょう？」

イタズラっぽく笑う山田に、僕はしてやられたと顔を青くした。

「まさか、危険日だったのか!？」

「ジョーダンだよ、ちゃんと大丈夫な日。てか、市川も私の生理周期知ってるでしょう？」

それはそうだが、男はそういう嘘をつかれると、無条件に反応してしまうものなのだ。

山田には今後、その辺りをきちんと教えてやらなければなるまい。

結婚直前の恋人同士だからこそ、やっていいことと悪いことはあるものなのだ。

そんな僕の焦りを余所に、山田はごろりとうつぶせになって、僕の方を見ながら話し始めた。

「今日は決めなきゃ行けないこと、いっぱいあるね」

「そうだな。結婚式の席順に、式場との打ち合わせも必要だし……」

「それもだけど！先に決めておくことあるでしょう？」

山田はむっと頬を膨らませて、僕を睨んだ。先に決めておくこと？何かあったらどうか。家事の分担は今まで通りで問題ないし、お互いの家への伝達と挨拶も済ませている。

これ以上決めておくことと言えはなんだ……？

「もお！！呼び方だよ、よ・び・か・た！！」

「呼び方……？」

「私もこれからは市川杏奈なんだよ？これまで通り、山田呼びじゃなくなるでしょ！」

山田に指摘され、僕は初めてその事実気がついた。

確かに、自分の妻を旧姓で呼ぶのはおかしいだろう。

こればかりは山田が正鵠を射ていると言う他にない。

「市川は、私のことなんて呼んでくれる？」

「う……そ、そうだな。やっぱり、あ、あん

……あん、あん、あんな……とか？」

「もっちゃんと呼んで。出来るでしょう？」

山田がまた僕を厳しく律し始めた。

こうなると、意地でもちゃんと呼んでやらな
いと話が進まない。

戸を開け放つ前の心地になって、僕は目の覚
めるようなその名前を、ハッキリと口にした。

「あ……杏奈。愛してる、杏奈……！！」

「……うんっ、私もだよ！京ちゃん！」

山田は耐えきれないとも言おうように、僕に
飛びついて唇を重ねてきた。

僕を京ちゃんと呼ぶことは、ずっと前から決
めていたのだろうか。

そんな疑問が頭に浮かんだものの、今日の前
にある無限大の幸福の前では、些末な事としか
思えなくなる。

僕は山田の肩を抱いて、長すぎるほど長いキ
スに応じてやった。

夜はまだ明けず、帳は静かに僕たちを包んで
いる。

星と月だけが僕らを祝福し、歓びだけがそこ
にあるような、そんな良い夜だった。

△了▽

< 限界を超えた何か (6)

既読
16:10

Postscript



ちりめんじゃ子

あとがきです。お手にとっていただきありがとうございました。ご感想は奥付のそれぞれのSNSにお願いします。

16:30



じよに

ブッダとキリストとアッラーが共演するが如き御本の末席に、恐れ多くも座らせていただきました……。ドチャクソエロい二人が書けたという自負があるので、感想お待ちしております。

17:57



マギラー

この合同誌に誘って頂いたこと、自由に描かせて頂いたこと、本当に感謝しております。おかげで先のことを考えず、自分のベストな方向で二人を描くことが出来ました。限界を超えて出し切りました。読んで頂けたら幸いです。市川と山田と、二人を応援する全ての人に幸あれ！！

18:03



みやほ

お誘いいただき、ありがとうございました。自分が理想とする「ズルいふたり」を書かせてもらいましたが、お楽しみいただければ幸いです。

18:06

12/24 (火)



蕎麦屋

お忙しいところすみません。Amazonのギフトカードを二万円分買ってきてもらえますか？あとでお支払いしますので

0:04



Can't take it anymore...

ちりめんじゃ子

Twitter : cerika_flipside

pixiv : 814303

マギラー

Twitter : iketenaiz377

pixiv : 129953

じよに

Twitter : Yamada_Ichikawa

pixiv : 2617998

蕎麦屋

HP : https://youtu.be/_y8Gcmnd41k

pixiv : 3762825

みやほ

Twitter : miyaho

pixiv : 6953895

奥付

サークル : チリメンドンヤ!

連絡先 : cerika_634@yahoo.co.jp

発行日 : 2021/01/10

印刷 : 株式会社ポプルス

無断転載等ご遠慮ください

掲載作は各Twitter・pixiv等で再掲する場合があります

"Can't talk anymore"



comic
ちりめんじゃ子
マギラー
novel
じょに
蕎麦屋
みやほ